

「地域学あしたの明日を考える」記録

企画趣旨

ながい歴史的環境の積み重ねの上につくりあげられてきた都市の構造——。それを幅広い視座から読みとくための場としての江戸東京フォーラムも既に一三〇回と回を重ねた。かえりみれば、この一〇余年は全国各地においても画一的な町づくりにあきたらず、その固有の地域文化に着目して、独自の町づくりを指向する動きが芽ばえて来たときでもあった。都市、あるいは地域構造の中に秘められた歴史を共有し、地域学の将来の実践的役割をよりみりのり多きものとするために、財団創立五〇年記念フォーラムとして開催し、情報の交流をはかりたい。

日 時 一九九八年一〇月三日(土) 一四：〇〇～一八：〇〇

会 場 北沢タウンホール一階 らぶらす 研修室

開催にあたって

陣内 秀信 …… 三

江戸東京フォーラムと地域学

小木 新造 …… 四

大阪学から

橋爪 紳也 …… 八

東北学から

結城登美雄 …… 一九

江戸東京学から

森 まゆみ …… 三五

討論

(司会) 陣内 秀信 …… 四八

講師・司会者紹介 ……

……… 五六

江戸東京フォーラム話題一覽 …… 五七

開催あいさつ

(財)住宅総合研究財団

峰政 克義



私どもの財団は、一九四八年に清水康雄が中心になって設立した財団でございます。今年で創立五〇年を迎えます。皆様のお蔭で五〇年を迎え、しかも、日本建築学会賞(業績部門)をいただきました。それも、研究助成やこのようなフォーラムに対して評価をしていただいたからでございます。ありがとうございます。

今回の江戸東京フォーラムは、五〇年記念ということで、いつもより少し盛大にやらせていただいております。これは、今日お見えになっている小木先生以下の先生方のお蔭で一三〇回も続きまして、私ども住宅総合研究財団のフォーラムの中で、いちばん開催回数が多いフォーラムでございます。これからも先生方のご尽力をいただきまして継続してまいります。よろしくお願ひしたいと思います。

簡単ではございますが、ご挨拶に代えさせていただきます。



■フォーラム「地域学の明日を考える」

江戸東京フォーラムは、一九八六年に始まり、一二年も続いております。各分野の方々から発表をしていただいて、自由なサロンとして、刺激的な討論を続けてまいりました。その発展上に、「地域学の明日を考える」というフォーラムを企画しました。

「地域学」という言葉は、最近よく聞くようにはなりませんが、はっきり確立してはいません。これから試みが行われ、クリアーな像が浮かび上がっていくものだと思います。今日は、いろいろな立場で、活動、研究をなさってこられた方々に集まってもらいまして、自由に論じていただきます。地域学の中に江戸東京学というのがあります。小木先生を中心に、チャレンジをしてみたいりました。江戸東京博物館も、その経緯の中で生まれました。江戸東京学にしても、地域学にしても、大きく分けると二つのポイントから生まれているようです。一つは、日本あるいは世界中の学問が、

個別分野に分かれて、硬直化してきた、それを乗り越えて、本当の知の体系を作り上げるための学際的な研究が求められてきた、そこで地域を考えれば、いろいろな分野からのアプローチが可能で、生きた学問が築き上げられる、ということなんです。もう一つは、実際のまちづくり、地域おこし、環境の問題を考える上で、地域からの発想が必要になってきたということなんです。地域のアイデンティティを認識し、文化を掘り起こし、歴史を学び、未来を考えようという、生きた、行動的な学問のあり方が求められているのではないかと考えております。

■講師紹介

講師の先生方をご紹介申し上げます。まず、小木新造先生です。江戸東京学を提唱され、江戸東京博物館の前館長もお務めになられました。江戸と東京を切り離すのではなくて、一緒に見ていくという新しい学問を作られました。『東京時代―江戸と東京の間で』、学術書では『東京庶民生活史の研究』という大作のご著書があり、幅広く活動されています。

次は、京都精華大学の橋爪紳也さんです。建築史がご専門ですが、今日は、「大阪学」についてお話しくださいます。広い視野とユニークな視点から、都市の問題、人間と文化の問題を掘り下げられていて、『に

ぎわいを創る―近代日本の空間プランナーたち』や『明治の迷宮都市』など、刺激的な本を書いておられます。大阪や京都で、行政、財界、市民の方々と一緒になって、アクティブに地域づくりにかわり、リーダーとして活躍されています。都市文化を論じていただきます。

三番目は、まちづくりプランナーの結城登美雄さんです。ご出身は山形ですが、仙台に長く住んで、東北各地の広い範囲でユニークな活動をされています。地域の歴史を掘り起こし、市民、住民の方々と一緒になってドキュメンテーションし、地域おこし、都市づくりの活動、フィールドワークをなさっています。

最後に、森まゆみさんです。地域学の元祖といえますか、通称「谷根千」、谷中、根津、千駄木の地域を対象に、地域雑誌を作っておられます。「谷根千」も江戸東京フォーラムと同じぐらいの歴史があるようです。活動が評価されて、サントリー地域文化賞も受賞されました。作家としても、「鴈外の坂」などを発表され、高い評価を受けています。保存問題や地域のまちづくりでも大活躍をされて、実践を伴う地域学を作っておられます。

本日のフォーラムは、東京が一つの柱ですが、それに対して大阪と東北からメッセージをいただいで進めたいと考えています。



一つの学問を進めてくると、対象は同じようなことであっても、歴史学だとか民族学だとか地理学だとか、各分野ごとに分かれて研究すると違ってくる。そうではなくて、学際的に、いろいろな人が一つのポイントを集中的にやったらどうだということが、この江戸東京学を始める最初の話だったので。

■学際的研究の必要性

今日は私は、並び大名みたいにして、ここにいれたいというお話だったので、実は何も用意していません。ですから、ちよつと話がまとまらないかもしれません。ご勘弁いただきたいと思えます。

先日、京都にある国際日本文化研究センターの評議員会に、出かけましたら、地域学をやっている滋賀大学の学長さんが来られていました。学長さんは確か動物学がご専門で、学部長さんが歴史学がご専門なんです。大変ユニークな大学で、地域文化学というのがあるのです。

次いで、大阪府吹田市の国立民族学博物館館長の石毛さんが、自分たちも地域文化学専攻の大学院後期生を募集している、という話をし出したのです。その専攻ができたのは最近だそうです。理由は、われわれの江戸東京フォーラムと発想が同じなのです。

■江戸東京フォーラムの発足

今から一二年前、東洋大学の内田雄造さんと陣内さんが我が家に来られて、住宅総合研究財団、当時は新住宅普及住宅建築研究所といっていました。そこで研究会を始めたいので、私に入ってくれということをおっしゃったのです。しかし、私はその財団は「住宅のことをやるのだから、駄目だ」と言ったのです。私の専門は歴史学で、古い住宅の話はやっていないからとお断りしましたが、ともかく専務理事と会ってくれと言われました。そうして会った専務が、今この会場にいらっしゃいますが、かつて、ある所で喧嘩腰で建築上のことでやり合った人だったのです。まずまず、これは駄目だと思ったのです。

建築を研究する場合に、建築の歴史を知らなければならぬということはあるので、それだけではなく、これからどういうニーズがあるかということを考えて

きに、いろいろな学問の総合がなければ駄目だ、ということをお私専務に言いました。そうしたら、是非そういう形で始めてくれと言ったので、それでは、住宅のことだけ、建築のことだけを扱うのではなくて、いろいろなものを一つの目標を基にしてやっていきたいと思います。それで考えついたのが「都市論」なのです。このようにして、江戸東京フォーラム研究会は発足しました。

■江戸東京の連続性

江戸と東京というものを切り離して研究するのは歴史学の一つの癖で、近世をやっている人は近代をやらぬし、近代をやっている人はあまり近世に踏み込まない。ところが、私のように、その中間のことを自分の学位論文の対象にしたような者にとつては、どちらもよくわかっていないと理解がいかないのです。

私は、内田祥哉先生という東京大学建築学科の先生にほめられたことがあります。明治の初めに経済学者が言っている言葉のなかに、長屋を建てるときの一つの考えとして、主人公は三年で元取りをするという「三年元取り」という言葉がある、ということをお話したところ、先生は、「それは誰が言ったのですか」と言われました。それがきっかけで、今もお付き合いをしているの

ですが、「三年元取り」などという言葉は江戸時代の資料には一つも出てこない。明治五年の資料に、そういうことが出てくるわけですから、スパツと時代を切つてはいけません。

もうひとつ例をお話ししましょう。かつて、大きな火事の消火が困難であったのは、屋根がこけら葺きだったからです。桂離宮もこけら葺きですけれども、一般的にこけら葺きというのは、屋根瓦の下敷きをつくる、そこでお仕舞いにしてしまう葺き方です。ですから、火事になれば必ず何十軒も焼ける。何十軒どころか、ちよつと西北の風が吹けば、百軒、千軒と焼けるのです。焼けたあと、すぐ家を建てる風習がある。

ベルツは、そんな火事場を見て、日本人というのは世界でいちばん楽道家であると非常に驚いています。トルコ人よりもっと楽道家であると。火事場に行つて、みんなが喜んでいて、ということを書いていきます。喜んでいてというのはちよつとオーバ―ですけれども、少なくとも、集まって焚き火をしていると言っています。昨日焼けたのに、今日はもう簡易な家が續々できていて、こんな国は見たことがない、という話をしていのです。

これも、江戸時代の資料には出ていません。ベルツが来たのは明治時代なのです。ですから、両方に掛け橋を掛けなければい

けないのです。

江戸と東京は地域が一緒です。地域をぶつた切つて研究しようとするのは歴史学の上では当然のこととして、近世史と近代史というのは社会の構造自体が変わつてきますから、それをよく勉強するというのは当たり前のことなわけですけれども、大阪とか横浜というのは、大都市であつてもそういう必要はないのです。大阪学がありますけれども、これは近世も近代もやる。横浜もそうです。けれども、江戸と東京というのはどうしても切り離して考える。そうではなくて続けてみたらどうだろうか、ということなのです。つまりそれは、今の言葉でいえば「地域学」ということです。それを、十二年前に、江戸東京フォーラムでやりましょうということになったのです。

■学際的研究の魅力

庶民生活および庶民の感覚、あるいは庶民に対する為政者の感覚というようなものを調べてくると、どうしても、いろいろな学問の力を借りないといけない。これはやつていて面白いのです。知らないことの中に入つていくと、無限の原野で、先がどうなっているか全然わからない。けれども、闇を解いていくような、そういう感じがいたします。

研究のやり方として、いままでの理念に

基づいて、歴史学がこうだから、こうだ、というやり方でないものをやるのには、江戸東京フォーラムはちょうどいい場になりました。一三〇回も続きましたのは、一度発表された方が、また次の人を紹介してくださつたからです。ただ、残念なことに、あるポイントを決めて、それにまつわる話を五回、十回と重ね、また次に行くというやり方が、私はいちばん望ましいと思つたのですが、それはなかなかうまくいきませんでした。しかし、ともかく建築学、歴史学、社会学の人たちが日ごろやつていることが、積み重なつていったのです。

新しい、全然知らない分野の人の話を聞くというのは、大変な勉強になります。そのうちに、何か学際的にやる方法というものを少し考えていかなければいけない、ということが組上に上り出してきていたわけです。つい一、二年前から、来年はどうするかということを考えるときに、いつもそれを頭に置いているのですが、実際は惰性で来ている。一三〇回を契機にして、少しその辺のことを考えなければなりません。

■地域学と学際的研究

先ほど申しました国立民族学博物館でやつている地域文化学専攻というのはエスノロジーですから、例えば、フランス、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、アフリカとい

う単位で地域を勉強するというところで、これは素直に学問の系統というものがわかっています。学者になる人、つまり学位論文だけを書くような人を集合させて勉強させるための学科として、地域文化学専攻というものをつくってある。石毛さんという人は非常に面白い人で、食い物の研究をしている人なのですけれども、それが民族学の館長ですから、何をやり出すかわからないというぐらい面白い。新しい分野で、地域学も膨らみが出てくるという感じを持っています。

滋賀県立大学は、そのパンフレットで歴史家の村井康彦さんが、ちよつと長くなりませんが、次のようなことを言っています。「地域に固有の風土の歴史を考えると、近江ほど地域文化研究にふさわしい場所はありません。海には接していないけれど、琵琶湖という大きな湖が真ん中にあります。大津は、古くから日本海を介して東アジアと通じる大陸文化の導入路だったんです。渡来人の墓も多く、早くから異文化を吸収し、共存してきた歴史を物語っています。一見内陸のようでありながら、道は縦横に通じていて、回廊的な要素が強く、しかも琵琶湖を囲む文化圏として、一つの独自性を持っている。この回廊性と独自性という特徴は、交流と比較研究という地域文化研究の二つの大事な要素を満足させるもので、

近江という一つの地域から、個別と普遍を同時に研究できます。地域文化研究には、歴史学、地理学、考古学、人類学などの学際的なものの考え方が必要です。私も、自分の専門領域以外をもっと勉強しないといけません。地域文化を明らかにし、理解することは、交流の基本であり、国際化の前提条件です。情報が発達し、世界が狭くなっている今ほど、地域文化研究が求められている時代はないと思います」と。

それから、秋田学ということを始められた加藤さんという人が論文で、秋田学をやり始めたときにいちばん大事だったのは、やはり学際研究だと書いてありました。地域の学問を深めるのには、学際研究をしなければいけない。そういうことをなぜ今まであまり大事にしてこなかったのか、というのが私は不思議なのですけれども、そこに到達したということは大変結構なことです。これから地域学をどんどん盛んにするというのは、学問の進歩のためにも素晴らしいことだと思っています。

■地域学と方法論

ある一定地域の庶民生活を研究しようとするとき、現地の民俗を探訪することが有効なことはいまでもありません。

しかし、一部の民俗学者のように文献史学で庶民史は解明できないと断定されるの

はどうかと思います。地域学を押し進める方法は、民俗学的現地民俗の探訪と、その地域の過去を物語る文献を蒐集して、その解明を合わせて考慮すべきだと思います。気をつけなければならぬのは、学問の方法だけを論議していて、研究目的の本質がわからなくなることは避けるべきではないでしょうか。

地域学は始まったばかりなので、地域の研究をどのような形で進めていくかということをだんだん積み上げていくという方法を、これからやるべきだろうと思うのです。方法論がないと学問が進まないのは当たり前ですが、それを最初から取り上げるのではなくて、地域の何を調べるか、それにはどんな学問が必要か、ということとを合わせて研究していくうちに、自然にでき上がっていくものだと思うのです。

このように考えますと、江戸東京フォーラムは一二年経って、暗室の中に一点ポツンと穴があいたかな、というのが私の実感です。やがては、ちゃんとした体系ができ上がる。若い人たちがやってくださる。そのぐらいに思っているのです。

■「下谷、浅草の人口小史」の意義

私は、森まゆみさんと一緒に台東区史の仕事をしています。当初、森さんと座談会をやるはずだったのですが、何か書いては

しいということ、下谷、浅草の人口小史」というのを書きました。

一般に下谷、浅草地域の人口増加は昭和に入ってからという通念がありますが、明治五年の「東京府志料」をよく調べてみますと、近代のはじめから人口密度はかなり濃いことが明瞭です。明治末年には、地方からの集住者が五一%に、地元生まれが四九%であった。そのうち、新潟県、富山県、石川県からの方が多いのは、江戸時代末期からの現象と思われるし、江戸東京を連続してみる見方が必要です。

ところで、東京山の手はどうかと言いますと、麹町には薩摩、長州、土佐の人たちが多く移住してきています。これらを総合すると、移住者の職業に注意を向ける必要がでてきます。つまり、一つの地域の問題は、隣接諸地域の問題の解明に転移するという事です。このようにして、地域の拡大は研究内容をより豊富なものにしていくわけですが、それを逆に広域から見ると、小地域からの出発する研究方法が多くの稔りを生むと思われれます。いま台東区史をやりながらそんなことも感じていますし、これも地域史の一つのあり方だと思つていきます。

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは一九八六年五月に住宅総合研究財団の助成研究として発足、七月に第一回フォーラムを開催しました。翌年度から、財団委員会活動として、現在に至っています。

メンバーは、小木新造、内田雄造、陣内秀信を委員とし、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学等の研究者等で構成しています。

フォーラムの目的は、都市機能が雑然と混ざりあつて、極めて幅狭した多重構造都市・東京を、江戸から今日までの都市形成の発展と、文化変容の過程を一貫した視座から学際的にアプローチすることです。

フォーラムの活動は大きく次の三点です。

第一は、文化発信都市「江戸東京」を浮世絵や屏風絵の史料から多角的にアプローチし、祝祭、娯楽、風俗、モードやメディアにあらわれる都市の文化的様相を読み解いたことです。

第二は江戸開府と共に始まった都市計画は柔軟で固有な都市を形成してきました。その歴史的連続性と都市の経験を問い直し、生活空間としての都市のコスモロジーとアメニティを考えました。

第三は、江戸東京に住まう人々は、いかにコミュニティを形づくってきたか。生活の場としての住居、界限での人づきあい、土や緑や音の風景と環境の移り変わりを見つめ、大都市のまちづくり

のこれまでとこれからを再考しました。
江戸東京フォーラムでは、成果を次のように発表しています。

住宅総合研究財団の助成研究として、「住総研研究年報」一四号（一九八八年）に研究成果を報告しました。その後は、財団の委員会活動として「住総研研究年報」一八〇二四号（一九九二〜一九九八年）に報告をしました。

第六〇回には、「江戸東京を読む」を記念出版し（筑摩書房、一九九一年）、あわせて、記念フォーラムを開催しました。「芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる—」をテーマに、小木新造を講師に、内田雄造を司会者として、行いました。

第一〇〇回にも、記念出版をしました。「江戸東京学への招待」と題して、文化誌篇、都市誌篇、生活誌篇の三分冊を出版しました（日本放送出版協会、一九九五、一九九五、一九九六年）。記念フォーラムも同じテーマ、「江戸東京学への招待—生活の舞台としての都市空間—」として、江戸東京博物館ホールで開催しました。講師は、小木新造、陣内秀信、高階秀爾、田中優子、司会者は内田雄造で行いました。

そして、今回（第一三一回）は、住宅総合研究財団創立五〇年記念フォーラム「地域学の明日を考える」を開催しました。

大阪学から

橋爪 紳也



■なにわ大阪学に向けて

今から一五年ほど前、私は大学院の博士課程におりまして、建築学から都市計画学の講座に動いたのですけれども、当時、江戸東京学が関西のほうでも華々しく聞こえていました。私は、小木先生とか陣内先生のご著作を、それこそバイブルのように読んで勉強していたわけです。

ところが、大阪とか京都では、そのような都市研究の動きが顕著ではありませんでした。特に、江戸時代と近代以降、明治以降をつなぐという視点は、関西ではほとんど語られることがなかったわけです。そこで、私はそのとき大学院生でしたが、これではいけない、誰もやっている先輩がいらないなら、私を手をつけてやろうと、今から思えば大それたことを思い描いて、江戸東京学に対抗するべく、「なにわ大阪学」とか、ご存じのように江戸時代の大阪は「大坂」と書いていましたので、「大坂大阪

学」というものを勝手に提唱しまして、私はこれを深めていくのだと、一人で小さな声を上げたのです。いまだに、その声は、細々としており、ひとりで言い続けているという段階です。そういう意味から、今日は江戸東京学の本丸といえますが、中心に初めて足を踏み入れて、非常に感慨深いものがあるのです。

■大阪学の現状

今日は、大阪学の状況から地域学の明日を考えろと言われました。私は大阪学というものの全貌を把握しているわけではありませんが、いま最も注目されている大阪学の動きというものを、まず初めにご紹介したいと思います。

それは、大阪市が今準備している新しい博物館を中心とする動向です。従来の博物館は、大阪城の中にあつた軍の施設を転用した小さなミュージアムだったのですけれども、建て替えに入ろうとしています。今は設計の段階で、基礎の工事が始まったところではあります。パブルのところに、大阪の行政は文化的な施設をつくらうとしたのですがなかなかできなくて、いちばん後回しになっていました。それが、ようやく実を結びつつある。たとえば、大阪の博物館を建て替える計画、考古学の新しいミュージアムをつくる計画、NHKの大阪放送局を建て替

えるという事業が、あるエリアで検討されていたのです。ところが、パブルのころから言われていたにもかかわらず、いずれも全くできてこなかった。それが、この三つを併せて一つの施設にしまおうというかたちで、ようやく話が進み出しているのです。私は、これは非常に面白いことだと思っています。構想だけあつてできなかったということを逆手に取って、従来なかつたような複合施設というものが今できようとしていくからです。

ユニークなのは、難波宮という昔の遺跡の発掘現場をそのまま保存した上に、近世近代、現代に至る大阪の歴史を全部俯瞰するようなミュージアムをつくらう、ということに結果的になつた点です。歴史系のミュージアムと考古学のミュージアムとの複合化がなければ、そんな話にはならなかつたわけです。考古学の博物館は遺跡の所に建つて、近世、近代の博物館はほかの場所に建つというふうに分かれたと思うのですけれども、結局は、そうはならなくて、非常にユニークなミュージアムができそうです。その新しい博物館で、大阪学というものをこれからきちんと進めていきたいと思います。という話が出てくるのです。

従来、大阪にも、いろいろなミュージアム、あるいは研究施設がありました。大阪市の関係しているものだけでも、例えば、

下水道の博物館、平和をテーマとしたミュージアム、人権問題のミュージアム、自然史の博物館というのが既にあります。あるいは、大阪城天守閣も、秀吉の時代に特化した歴史系のミュージアムです。それ以外にも、いま構想が進んでいて私が関与しているものとして、海洋博物館、それから住宅系のミュージアムというものもあります。海洋博物館は、大阪の港に入っていた北前船とか、瀬戸内海の船などを展示する博物館です。そして、住宅系のミュージアムというのは、江戸時代の大阪の町並みをそのまま再現しようというものです。それから、これらはまだ工事に入っていませんが、いざれつくりたいというものとして、文学館、近代美術館、それから、住友の工場があったことにちなんで銅のミュージアムという構想も大阪市は持っています。

面白いのは、それぞれをつくらうとしているところが、教育委員会などというところだけではないところです。住宅系の展示施設というのは都市整備局がつくらうとしていますし、すでにある下水道のミュージアムは、当然下水道の部局がつくっている。さらに、海洋博物館は港湾局ですし、天守閣は経済局が持っているのです。観光目的の施設ということで、経済局が天守閣をつくったのです。

ちよつと余談になりますが、あの天守閣

は面白いのです。秀吉がつくった天守閣も家康がつくった天守閣も燃えてしましました。短い間しか建っていませんでした。今の昭和の初めに建った鉄筋コンクリート製の天守閣が、大阪城天守閣の歴史始まって以来、長くあの場に建っているのです。それで今はあれが本物だということになって、去年、全面改修したのです。

こういうふうには各部局がばらばらに、またテーマもばらばらに、いろいろミュージアムとか研究施設をつくってきたわけですが、実は、同じ施設を、それぞれにつくってどうなるのだと、バブルが弾けたあとに議会で問題になったのです。そこで大阪市の「大阪学」というものを打ち出して、全部を調整していこうと考えたわけです。今は、新しくできる市立博物館をネットワークの核として、それぞれのテーマごと、部局も全然違うミュージアム群というものを町の中に点在させて、全体をつなぎつつ一つの地域学みたいなものを立ち上げよう、というふうに動き始めています。まだその中核の施設がオープンしていませんけれども、これができるとかなり見えてくるのかなと思っっています。

■地域学と地域イメージ

ここで非常に面白いのは、単に調整するだけではなくて、従来なかった大阪の地域

研究のあり様みたいなのを打ち出しているということ。従来の大阪の地域研究というと、例えば、経営学の宮本又次先生が延々と重ねられていた業績があります。それは、基本的に大阪は商いの都である、さまざまな経営者とか商売人を生み出してきた町であるというふうには、ある分野に特化していた研究でした。あるいは、大谷晃一先生の「〇万部を超えた地域学の本、『大阪学』」というのが何年前にありました。ほとんどが東京で売れて、大阪の人は全然買わなかったという噂もある本なのですけれども、あの本の中で書かれているのは、従来型の誰もが持っているようなステレオタイプの地域像をなぞるような研究だと私は理解しています。

それは良い悪いではなくて、いちばんわかりやすく言うと、大阪とは、タコ焼きと吉本と阪神タイガースに代表されるとするような大阪論です。大阪の切り口というものが、繰り返し繰り返し増幅されていくわけです。それに対して、大阪市が今進めようとしている大阪学というのは、そうではなくて、例えば江戸時代の船場文化というものがあるとか、モダンイズムの大阪、東京の震災後の大阪は文化的にも日本の中心であったとか、従来なかったような大阪イメージを出そうという研究で、これが今、盛んになってきつつあります。

一例をあげましょう。これは、先ほどの考古学センターと博物館を併せるという、その敷地の関係から出てきた話かと思うのですが、古代の大阪を強くアピールしようとしてあります。大阪には昔、難波宮という都がありました。それは、今からおよそ一四〇〇年前のことなのです。平安京が一三〇〇年、平城京とか藤原京が一三〇〇年ぐらいですが、大阪はそれよりも古い、「難波宮千四百年」と銘うって、打ち出しているわけです。上町台地の上に、かつてアクロポリスがあったという言い方をしている。去年は、古いほうの大阪市立博物館で「ギリシアのアクロポリス展」という特別展を実施しました。「大阪アクロポリス構想」というようなことを、考古学の先生が提唱されたりしているのです。近世の商いの都、天下の台所と言われた大阪、あるいは現代の、吉本などに代表される大阪像とは違う地域のイメージを生産していこう、というふうな方向付けが、ここに示されているわけです。つまり、今の大阪学には、ステレオタイプの大阪像を打ち出す仕事と、新しい大阪像を過去から発見し、あるいはクリエイティブに打ち出していこうという仕事の、二極があるわけです。

この状況を非常にわかりやすい形で示しているのが、これはある人が冗談混じりにおっしゃっていたのですが、大阪に海外からVIPが来たときのレセプションだというのです。そのときに、知事と市長が挨拶をするわけです。まず知事は、ご存じのよう横山ノックさんです。知事は、「タコ焼きでも食べてください」みたいなことをおっしゃる。APECのときのレセプションでも、庶民的な吉本やタコ焼きの大阪のイメージというのを、一所懸命出しておられるわけです。一方、市長は磯村さんといまして、大阪市立大学の学長から助役を経て市長になられた方で、非常に論理的に大阪のことを語られる。この二つの挨拶が続くというのが、まさに現代の大阪であるのだ、ということが言われています。私も一度だけその現場にいたのですが、確かに、その落差たるや、非常に面白いわけです。

大阪市としては、従来とは違うイメージをつくっていこうとしています。もう一つ例をあげましょう。大阪に中之島という地域があります。市役所とか図書館が並んでいるエリアなのですが、そこはフランスのシテ島に似ている、明治のころに来た外国人も「ここはフランスみたいだ」と言った。それをふまえて大阪はパリなのだ、というふうなポスターを大阪市が作って、地下鉄に張ったりしたことがあったのです。これに対しては、「何を言うてるねん」というふうな市民もいたわけですが、新しいイメージを増幅させようという動きが、よくわかります。

■大阪学の周辺

そういう二極に分化した大阪学というものが中心にあるとして、近年、大阪の周辺でも地域学というものが非常に盛んになってきました。当然まちづくりと連動しながらすすめているわけです。私が関与しているものでも、例えば、大阪のすぐ南の堺市、千利休とか与謝野晶子とかを輩出した町ですが、そこでは「堺学」というものを提唱して、シンポジウムをやったり本を出版したりしています。そこでは、堺は大阪とは違うのだ、という色を出そうとしているわけです。

「阪神間学」というのがあります。これは阪急電鉄とか、あとは芦屋市、西宮市、尼崎市、宝塚市辺りの神戸と大阪の間の各自治体が、協力しながら打ち出した学間です。阪神間学は、関西における郊外型の地域研究の一つの新しいアイデアをそこから出したと思います。あるいは、「淡路学」というのがあります。淡路の国は、明治以降は兵庫県に入ってしまった。明石海峡大橋がかかることになった時期に、地域学をちゃんとしましょうということで、淡路学というものがなされます。大阪学というものを相対化するように、周辺にさまざま

まな地域学というのが生まれてきているわけです。

内なる地域学といえますか、大阪学の中もさまざまで、地域ごとのまちづくりで、「学」と名乗る団体がいろいろできてきました。私がかかわっているものに、「北の新地学会」というものがあります。ご存じのように、大阪の北の新地というのは、こちらでいいますと銀座、赤坂の辺りに並ぶような歓楽街です。そこに、新しいJＲの駅ができて、人の流れが変わった。パブルの崩壊などもありまして、いま非常に衰退している。高級クラブほどどんどん潰れる昔からある料亭がばたばた店を閉めているという状態なのです。このように従来の社交の場である盛り場、歓楽街が変わろうとしている。これではいけないということで、勉強会をしましょう、ということになったわけです。

これも、まちづくりなのです。今から二年ほど前ですが、たぶん日本で初めて、飲み屋とかスナックとかクラブしかないエリアで、商店街の連合会ができたわけです。その動きとは、少し距離を持ちつつ「学会」をはじめたのです。私たちみたいな研究者と、大阪の財界の人が参加している。さらに、この学会のすごいところは、ホステスさんとかママさんを大量に動員しているところなのです。

全日空ホテルという非常に大きなホテルの、何百人も入る大ホールで、北の新地学会を立上げるシンポジウムをやったのですが、会場の約三分の二ぐらいがママさんとかホステスさんでした。皆さん、その後ですぐお店に出ますから、髪もきれいにし、着飾って、非常にきらびやかなシンポジウムでした。普通、まちづくりのシンポジウムといえますと、ネクタイにスーツを着たおじさんばかりが会場を占めているのですけれども、そうではない。壇上から見て、これはすごい。こんな学会はない、と思いました。NHKも取材に来て、大阪ロカルルの七時のニュースで、北の新地学会旗揚げといって会場風景をパーツと名めたのですけれども、信じられないようなニュースだったと思います。

このように、立上げは派手だったので、大阪の財界とか、行政のお歴々に顧問などに入っていたらやっていけるのですけれども、今はもうちよっと地道になりました。私たちからすると、地道になりすぎて、だんだんママさんたちの「これからのクラブ経営」というような勉強会になってきて、歴史研究ではなくて、かかわり合いもなくなってきたのです。けれども、盛り場からの地域学としては、非常にユニークなものなのです。私は副会長に収まっています。が、なかなか大変です。

■大阪学と三都比較

いまの北の新地学会の話などは、ああ、大阪らしいな、と皆さん思われたのではないかと思います。これは、さつき申し上げたように、大阪は商いの都である、というステレオタイプといえますか、既存のイメージの中にピタッとはまるので、了解されやすいわけです。この大阪らしさというものをどうみなすのかというのが、大阪の地域研究において、いつも議論になってくるわけです。

そういう地域らしさということ論ずるとき、特に大阪の場合いつも出てくるのが、比較という視点です。江戸時代などには、「三都比較」、京、江戸、大阪の三つの町の特徴、あるいは気質を比較するという書物もいろいろ出ていますし、大正時代にも大阪、東京、京都を比較するというような研究書が出ています。また、近代の大阪でいいますと、京都、大阪、神戸という関西の三つの町、京阪神三都は全然違うんだよというふうな研究も、山のように出ています。比較対象からみて、何が大阪らしさなのかということ論ずるような研究というもの、これまで世にたびたび問われているわけです。例えば、亡くなられた国立民族学博物館の守屋先生には、江戸のころの三都比較についてまとめられた研究があります。

ブームも、おそらく何度かあったと思います。ちょうど大正のころ、大阪が大大阪と呼ばれたころに、三都比較が非常にはやった時期があります。この辺りは、本日の資料に私の短い雑文がありますので、目を通していただければと思います。それから近年、ちょうど関西国際空港ができたときにも、大阪学ブームというのが巻き起こりました。しかし、この最新のブームは、どうも東京のメディアが飛び付いたような雲行きがあつて、大阪のほうでは実は全然定着していなかった、という感があります。ともかく、ほかの都市との比較の上で地域学に何らかのインパクト、方法論が生まれていくのだというふうなことを、非常に強く思います。

以前、パルコ出版という出版社から『大阪の表現力』という本を出したのですが、そこでの議論のなかに東京と大阪の比較というものがさまざまなかたちで出てきました。いろいろな人に大阪のことを語ってもらうと、どうも東京との比較の上で語ざるを得ないところがあるようです。

■官のまち、民の町

そこで繰り返し語られるモチーフは、大阪は官よりも民、行政などよりも民間のほうの力で成立してきた町なのだ、ということとです。あるいは、人間関係のありようと

いうのが非常に違うのだ、コミュニケーションの文化というものが相当違うのだ、ということも言われます。これはしばしば語られることなのですが、初対面の人同士が話し合うときに、大阪流のやり方というものがある。相手のことを全く知らなくても昔から友だちだったように話しかけるわけです。すごく心の距離が近いところから、もともと友だちだったように話しかけて、この人とは合わないなと思いはじめると、だんだん付き合いの距離を置いていくという方法をとるわけです。けれども、たぶん京都とか東京は、少し距離を置いたところからだんだん関係を深めていく、というふうなやり方をするのではなからうかと思えます。

それからプレゼンテーションのありようも違う。いろいろな表現の仕方がある中で、大阪の人は面白ければいいと考えがちだ、という点が強調されているところがあります。まず面白いというところから始めないと評価されないという地域性がある、というふうな言い方がされています。私は、これもまたステレオタイプみたいなものだと思います。そういうものが、またどんどん増幅されているようなところがある。比較という視点を入れたときでも、ステレオタイプというものが強化されていくということとです。

以前、あるシンポジウムで某宗教学者が大阪に來られて、開口一番、「私は大阪は好きだ。大阪はアジアみたいで、ざわざわしていて、とてもいい」というふうに言われました。彼はほめているつもりだったのですけれども、大阪の人は、「何で大阪がアジアやねん」と思うわけです。「東京はアジアじゃないのか。歌舞伎町はアジアじゃないのか」と言うわけです。そういえば、テレビのニュースステーションでも、釜ヶ崎で事件があつたときに、久米宏が「ここは日本じゃない」とか何とか言つて、大阪人が一斉に反発したことがありました。さっきの北の新地学会もそうですけれども、ステレオタイプの大阪論が展開される中で、商業地とか歓楽街、いわば道頓堀のあの風景が大阪の町全体を代表しているという物言いといるものが、常に増幅されてきたと言えるのではないかと思います。

■地域性と普遍性のはざま

私自身も、いろいろな大阪の歴史を調べてきた中で、既存の大阪的な見方と、もっと普遍性のある都市のありようを論じるところとのはざまにあつて、自らの語りをどうするのかということ、しばしば悩んできました。

私が書いてきた本で扱ったいくつかの地域の資料を、写真で紹介しながら、お話し

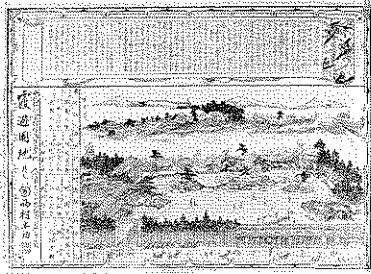


写真1

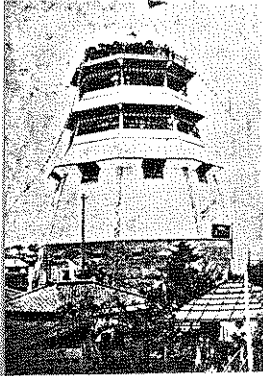


写真2

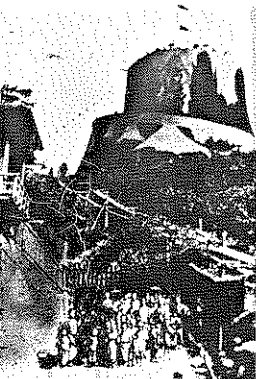


写真3

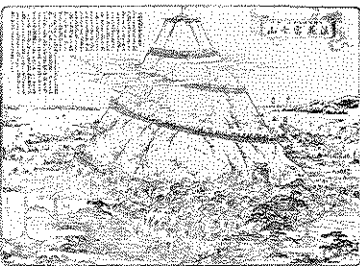


写真4

ます。遊び場所とか遊園地とかいう施設の
研究、あるいは盛り場の研究というのを進
めてきています。そういう着眼点自体がす
でに大阪的だ、と言われてしまうところな
のですが、大阪の遊び場所の変遷です。
写真1 大阪で最初の遊園地である霞遊園
地です。天王寺の近くにありました。これ
は、近世の遊園と近代の遊園の過渡期みた
いな例だと思えます。
写真2 明治二〇年代に、遊園地のブーム
がありました。これは、眺望閣という、明
治二一年にできた塔です。五階建てで、中
にいろいろな遊びの要素が入っている遊園
地です。展望台を中心とした遊園地です。
この五階建ての展望台が非常に人気が出ま
したので、大阪の北のほうに九階建ての凌
雲閣という展望台が出来上がりました。こ

の辺りの話は『明治の迷宮都市』という本
に書いたのですが、そのときに編集者から、
「大阪だけの話では駄目だよ。東京と比べ
なさい」というふうなことを言われたので
す。この凌雲閣は明治二二年に、浅草より
早くできたのです。浅草の凌雲閣ばかりが
いろいろな書物などに載りますけれども、
大阪の凌雲閣のほうが早いのです。名前も
ここから浅草が取ったはずなのです。実際
に、東京の凌雲閣ができてしばらくしたと
きの新聞広告を見ると、大阪側は「本家凌
雲閣」と書いてあります。浅草のは分家な
のです。そういう比較の話を入れていかな
いと展望台のブームというものは語りにく
い、という状況がありました。
写真3 浪花富士山です。
写真4 このチラシは、すごいと思います。

大阪の町が壊滅しているような描き方をし
ています。この浪花富士山の場合は、浅草
の富士山より一年か二年遅いのです。だか
ら東西の町の、どちらかではやると、どち
らかでまた同じようなものをつくっていた
ということがあった、ということを書かざ
るを得ませんでした。

■倶楽部と大阪

写真5 これも明治二一年にできました。
借楽園商業倶楽部のこれが本館と呼ばれる
開化式擬洋風の建物です。

写真6 借楽園商業倶楽部の新聞広告です。
勝手に、日本で初期のアミューズメント
クラブである、というふうに申し上げてい
るのですけれども、これは、一〇年ほど前
に書きました『倶楽部と日本人』という最

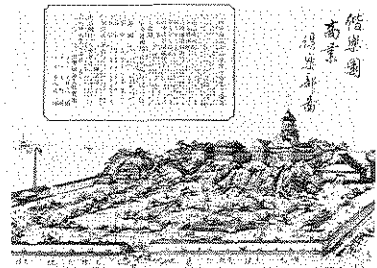


写真5

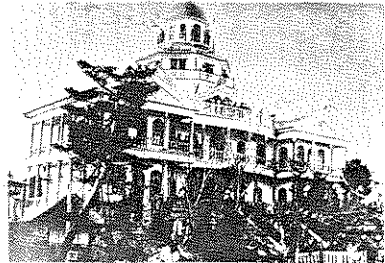


写真6

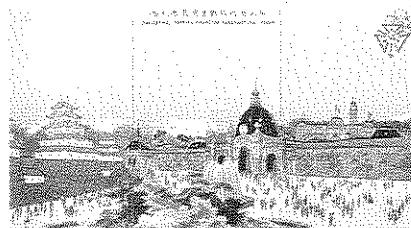


写真7

初の本で扱ったものです。そのときも、私は普遍性のことを語ろうとしていました。その本の中では、鹿鳴館のことも触れました。東京倶楽部というクラブのクラブハウスだった鹿鳴館というものがあつた、これは官がつくつたクラブである、というふうに書きました。そのころ、少し遅れてですけれども、大阪にこういう商業倶楽部というものができたわけです。これは、商人たちが金を出し合つて自分たちが遊びを提供する、そして入場料を取つて市民に開放する、というものです。倶楽部の右のほうに競馬場があつたり、演芸場があつたり、温泉があつたりします。ありとあらゆる娯楽の殿堂みたいなものを、倶楽部と称してつくっているわけです。借楽園商業倶楽部はいろいろ遊びの要素を集めようというわ

けです。これをつくつた天野皎という人は、当時の大阪府の役人で、財界の人に出資を呼びかけて、今風に言えば第三セクターでつくり上げたという、非常に面白いケースなのです。

私は全然意図していなかつたのですけれども、本が出てから書評を新聞などに書いていただいたときに、これは大阪論である、東京と大阪の比較の論である、というふうに言われました。鹿鳴館、東京倶楽部というのが官あるいは日本国の明治新政府を背負つたクラブハウスであり、商業倶楽部というのが大阪の商人たちの思い、これからの産業振興を考えてつくつたクラブである、というふうに読み解いていただいたわけです。これが、東京が官であり、大阪が民であるというステレオタイプに、ピタツとは

まっているというふうに解釈していただいたわけです。本を書いた本人は全然そんなことは意図してなくて、本当に予想外だったのですけれども、そのときにも、大阪を語る上では、東京と何らかの関係性を持ちつつ語るといふ以外に評価はされないのではなかるうか、と実感したわけです。

商業倶楽部を模倣して、いろいろクラブができるのです。日本官民一致倶楽部というが、明治二二年か二三年に天王寺にできたのですけれども、これも同じように、西洋館とか料理屋とか温泉とかを庭園の中に配するクラブハウスです。官と民とを一致させるといふのが面白いと言つと、これもたぶん大阪らしいという話に取り込まれていくところではないかと思つています。まだ具体的に調べ切れていませんが、『官民一致倶楽部』という雑誌も出ていたらしくて、倶楽部と名乗る雑誌としては、非常に古い事例ではないかと思つています。

写真7 第五回内国勸業博覧会場の絵葉書です。二〇年代の遊園地ブームの後に、明治三六年に大阪で行われました。余談ですが、左のほうにそびえているのは名古屋城の天守閣です。当時、愛知県は、博覧会に出品するたびに、張りぼての名古屋城を日本中につくつていったのです。名古屋のラシカイ屋は、これで商売をしていました。右のほうは偽物の西洋の町が広がっていて、

左のほうに天守閣が立っているという、非常に不思議な図式です。

写真8 大林組がつくったエレベーターです。この博覧会も、いろいろな遊びの要素が入ってきた博覧会だというふうに言われています。東京で行われた勸業博覧会というのは、もつと真面目に、産業振興などの目的で行われたのですけれども、大阪の例では非常に遊ぶ場所が増えたといわれています。

写真9 当時、珍しかった冷蔵庫です。各部屋に「肉が腐らない部屋」とか「魚が腐らない部屋」とかがあって、当時の人は非常に珍しく中を見て回ったそうです。こういうものも、娯楽の要素であると言われていました。

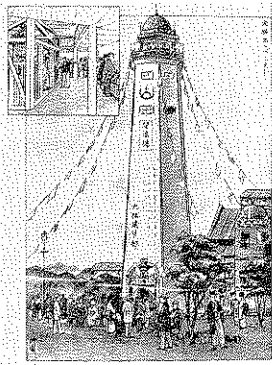


写真8

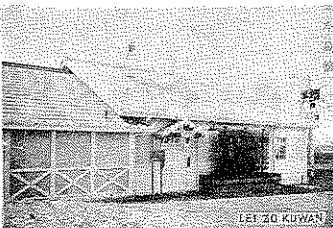


写真9

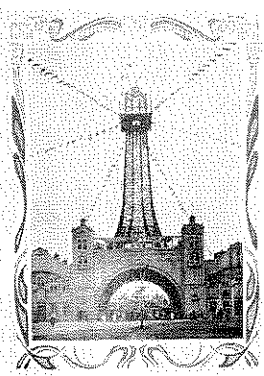


写真10



写真11

■娯楽と大阪

写真10 博覧会を論じる上でも、東京と大阪ということでは、「大阪は遊びの要素が強くなるんだよ」という物言いというものが、いつも付いて回ります。その最たるものが、明治四五年に出来上がった新世界という町です。『大阪モダン』というNIT出版から出した本で、ざっと書いたのですけれども、面白いのは「この街こそ大阪らしいのだ」というふうには、できた当時から議論されていて、いまだに大阪においては、非常に大阪らしさを引き受けている地域というふうに理解されています。町のシンボルタワーが通天閣なのですが、パリのエッフェル塔を真似したと言われています。建物の上に鉄塔が立っています。下のほうは凱旋門を真似したと。「凱旋門の上にエッフェル塔を真似した」というふうなことを、当時の人は考えたようです。

エル塔を突き刺したら、どこから見てもこれはパリだ」というふうなことを、当時の人は考えたようです。

写真11 当時の新世界の、非常に美しい竣工写真が残っていました。アールヌーボーのデザインで、非常にきれいなものですが、これなども、私は一所懸命「復刻したい、復刻したい」とこの五、六年言い続けているのですが、どこの出版社も取り上げたくれません。大阪の本は売れないのです。江戸のものなら売れる。京都のものもちょっと売れる。でも、大阪の本は売れない。どなたか、どこか紹介していただければ、ありがたいと思います。どうせ「売れない」と言われるのでしようが。

す。その中心にエツフェル塔が立っている。そして、真ん中の街区にはルナパークというニューヨークのコンニア일랜드を真似した遊園地があって、周辺の四方向にシアター、劇場、映画館を集めようと考えた。その南のほうには、噴泉浴場という非常に大きなお風呂と、電気旅館という旅館ができた。電気旅館というのは、各部屋に電気仕掛けのカラクリがあつて、床の間が光つて、ガタガタ動くというような、怪し気な旅館です。これ全体を、一つのデイベロツパーがやつたわけです。

面白いのは、ルナパークもそうですけれども、あとで紹介します興行街などで、非常に複合的な娯楽というものを見せたという事です。その最たるものは、連鎖劇と呼ばれるエンターテイメントです。舞台があつて、真ん中で芝居をしている。両側に映画のスクリーンがある。真ん中でやっている芝居の役者が陰にパツと飛び込むとまさにスクリーンの中に役者が飛び込んだように映画が始まる。そういうことを繰り返すわけです。真ん中にスクリーンを置いている劇場もあつたと思います。これは東京のほうが先だったらしいのですが、東京では、一年か二年という非常に短い間に人氣がなくなつた。ところが、大阪では、ここで延々とやっているわけです。そういうふうな面白さというものがあつます。

北半分のパリのところは専門店街なのです。中央のブロックが興行街で、メリーゴランドみたいな回転する絶叫マシン系も入っているとふうに、いろいろな娯楽の要素があつた。相撲の国技館も入りますし、いろいろなエンターテイメントが合わさつていたわけです。こういう娯楽が複合的に特化した町というものを、できた当時から非難する人がいました。当時の民衆娯楽研究者の権田保之助あたりは、「ここは、けしからん。いろいろな人が楽しめるように、いろいろな娯楽が混じつている所は、けしからん」というふうには非難したわけです。しかし、大阪市は、それに対して、

「いや、大阪は平民の都である。東京みたいに、銀座と浅草というふうには娯楽地が階層によつて割れているわけではない。誰もがこういう所でいろいろな遊びをして、金持も普通の人も、こういう町で庶民的に遊ぶのが大阪らしいのだ」と、「平民の都」という言い方で反駁するわけです。そういうふうな、できた時から、今につながるような商業に特化した、階層性がない、官と民だつたら民のほうの力が強いという都市性というものが、この町を中心に語られていましたし、いまだにそういうもの言いを受け継がれているわけです。

町には劇場や活動写真の小屋とか、イスラム風の非常に面白いデザインの看板建築

が延々とならんでいる風景もみられます。写真12 恵美須館という映画館です。張りぼての西洋館です。これはちよつとセツションみたいな要素が入つていて、非常に面白いです。そのほかにも、いろいろなアトラクションがありました。右のほうが氷山館で、北極かどこかに旅をするような、冷蔵庫を応用した見世物。左のほうは、観戦鉄道といつて、戦いの中を突破するような見世物です。

写真13 有名な美人探検館です。世界の美人を見て回るといふ触込みの、非常に人気

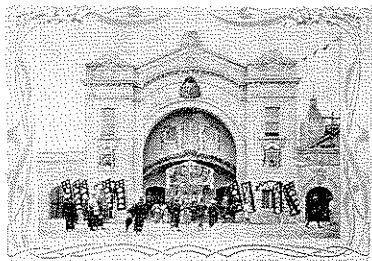


写真12



写真13

のあつたアトラクションです。中に入ると、例えば炎の中でも焼け死んでいない美人とか、水中でも溺れ死なない美人とか、顔が三つある美人とかがいます。私がいちばん笑ったのは、「顔が馬のような美人」というものでした。「それは馬やろう。美人ではなからう」と言いたくなりますが、そんな美人を延々と見ることができて、つまりはお化粧屋敷なのですけれども、最後に美女のレビューがあるという、面白いものです。

これにも、大阪と東京に関するいろいろな話があります。これは大阪では美人探検館として興行できたのですが、そのあと東京に、大正博覧会のとくに持つていったら、警察から「美人探検館とは、けしからん」とクレームがついた。それで、この業者はどうしたかというと、「美人島」と島を付けて、探検を旅行とした。「美人の島を旅行する。これでどうですか」と言つて、それで何とか通つた。「美人の身体を探検するみたいで、嫌らしい」ということです。やはり東京は、その辺の規制がきついな、ということのエピソードで書くと、これも従来型の大阪と東京との比較にポイントとはまってしまうというので、非常にまずいなと思つていのですけれども。

美人探検館には、パリやニューヨーク、大阪がありました。ニューヨークのシンボ

ルタワーとして、ホワイトタワーというものが建つていたり、ユニアイランド・スタイルの非常に面白い建築があつたり、滝の裏側にレストランがあつたり、楽しい趣向です。あと、ピリケンという神様を祀つていたピリケン堂があつたことでも有名です。通天閣とホワイトタワー、パリとニューヨークのタワーの間を、ロープウェイで結んでいるのです。二つのタワーを建てた間を、支柱もなくロープウェイで結ぶというのは、かつて日本の史上に例がないし、これからもないかもわかりません。画期的なロープウェイですが、詳細をみますと、危なかつたことが推測されます。夜になるとイルミネーションが輝いて、それぞれのシンボルタワーが光つて、非常に美しい町になつたようです。

■比較の学としての地域学

私は、遊び場所の歴史というものを大阪の事例に限つて、固有のといひましようか普遍的な話として、物語を作ろうとしてきたわけでは駄目だよ」といふ指摘を受けます。「東京との比較、あるいは、日本全体の中の位置付けを、きちんとしなさい」といふようなことを言われ続けてきたわけです。そこで、「大衆的」とか「民の文化」とか、最後の新世界の例でいいます

と、「複合する、いろいろな機能を混ぜ合わせるのは、実は大阪的である」といふ言い方を、あえてしてきたわけです。今ざっと申し上げてきたことから、個人的に考えますのは、ステレオタイプ、従来から言われてきた地域の物語というものを、どのように更新するのか、それも単に全部切り捨てて変えていくわけではなくて、従来のイメージというものも持ち続けながら、違う物語をどんどん発見して、上書きをしていく作業というものが非常に大事なのだろう、ということだと思います。そのような中で、私の場合は、比較という視点を強く受け止めてきたわけです。

■ネットワークの学としての地域学

比較の視点をさらに深めると、地域学間の連携ができてくる。私は、地域学というのはまさにネットワークの学であると思ひます。先ほども話をしました、北の新地学会をはじめののだということ、を、ちよつとある新聞に書きましたら、何日か後に電話がかかつてきました。山形に高橋義夫さんという作家がおられて、彼が山形盛り場研究会をしている、ということをお話したので、要は遊びたいということから始められた研究会らしいのですが、衰退している盛り場で、もつとみんなが飲むように、というイベントをやつていふというわけです。

私も呼ばれて、最近山形で遊ぶようになったわけですが、盛り場学をやるのだと言った段階で、各地で盛り場学というものを考えている人とのネットワークがすぐできていくという点が、非常に面白いと思うのです。無理矢理つくるネットワークではなくて、間に媒介者みたいな人がいていろいろな地域学をつないでいくという状況をどういうふうにつくっていくか、ということが非常に大事な点だろうということを、実感しています。

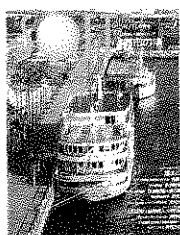
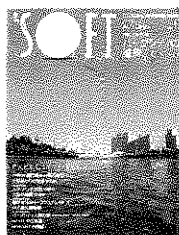
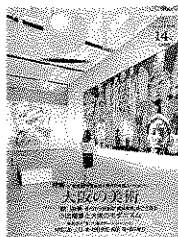
山形以外でも、名古屋の都市センターというところでも、盛り場研究と一緒にやろうということ、去年、一昨年と合同の調査をしています。東京でも特に銀座は、盛り場研究に特化したいろいろなグループがあると思います。ある分野に特化した地域ごとの交流というものを進めていくのが、地域学の一つの魅力であろうと思います。そして、初めに紹介しましたように、大阪市がやっています。分野が全然違う同じ地域で活動している人たちをつないでいく地域学というものが、今後もっと語られるのではなからうかと思えます。

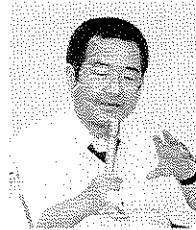
■方法学としての地域学

最後に強調したいのは、地域学というのは方法の学であろう、ということ。私も、恩師とか先学から習ったことだけでは

満足できなくて、調べ方とか語り口とかを自ら編み出していかなければいけないなわけです。つまり、地域学にかかわる人が一〇〇人いれば、一〇〇通りの方法があっただろうと思うのです。そうやってどんどん新しい方法を提案していくということが、新しい地域学の魅力になる。私も、大学では、学生には「こういう方法論でやれないさい」という指導は全然せずに、「自分で方法論を編み出せ」という指導を毎年しています。

大阪学からの発言ということになるのかどうか判りませんが、自身の経験から申し上げたいことは、地域学とは、一つは、ステレオタイプの地域像を更新していく学であるということ、二つ目は、人を媒介者とするネットワークの学であるということ、三つ目は、方法を固定するのではなくて次々に編み出していく方法の学であるということです。そういうものが自身の地域学であると、現状では理解しているところまで





■仙台という都市

「地域学の明日を考える」というのが本日のテーマですが、私がやっていることも地域学の一つなのだろうかと不安な気持ちで仙台から来ました。先ほど橋爪さんが、地域学というのは一〇〇通りあるのではないかと言っていたいたり、ネットワークと言っていたいたりして、半分ホツとしながらここに立っています。今、それを先に示してもらいましたので、少し気楽にお話ができそうです。

私も、陣内さんとか小木先生がやられたのを、仙台にいて、本を通じて「東京はいいな、こんなにたくさん東京の地域のことを調べたり考えたり、提案したりする方がいらつしやるんだなあ」と羨ましく思っておりまして。それは橋爪さんも同じだったと思います。私は仙台という所に住んでいますが、仙台というと、直ぐ伊達政宗で、あとは何も出てこない。これもなかなか辛

いわけです。いつも殿様の話で終わる。人口は一〇〇万、「仙台ってどういう町なんだ」と言われると、七夕と伊達政宗と笹かまぼこと萩の月と、何とも情けない話で、そんなことはあるまいと思うわけですが、なかなかそれに代わるものが作れないでじくじたる思いであります。

江戸東京学からいろいろ刺激を受けて、私なりに少しやってきたものがあります。それを勝手に「地元学」と呼んでいます。大体、地元の人間は自分の町を悪く言うのですが、仙台という所は自分の所をミニ東京だとうそぶいてはばからない人間が多いのです。言われてみればその通りかなという点もあります。東京都仙台区という人もいますし、当たらずとも遠からずで、「いやいや、あれは東京の植民地だ」という口の悪い建築家などもありたりして、「この野郎」とは思うのですが、半分は当たっているような気がします。仙台にいて仙台という町をどういふうに考えたらいいかかわからなくなっています。

そういう意識から、いつも何か東京の方へ向いてきたようなところが、仙台に限らず、また、東北に限らないと思うのですが、「東京のように」「東京に近づきたい」という思い、それはある種の近代意識とどこかでつながっているのかもしれないが、そういう中で東京のようにしていくのが行

政の力であったり、大きな力がそういうふうになつていったわけです。それは一方では結構な話なのですが、住んでいる人間たちはどうかというと、何となくバラバラにバラけていく。あるいは、在来のか細い文化みたいなものとか、コミュニティみたいなものも、バラバラになつていくなあという感じを持つておりました。別に仙台ナシヨナリズムを主張したかったわけではないのですが、もう一度この町を考える仲間はいないか。仲間がほしいという思いで始まったのが地元学です。向こうもよさそうだけれども、ここもまんざら悪い所ではないあるまいということで、向こうを横目でにらみながら、足元の向こう三軒両隣が、隣の奴はどうやって生きてきたのか、向かいの家はどうだったのか、あのばあさんはヨタヨタしているけれど、昔は美人だったという話でも聞いてみようじゃないかというところから、人を集めていきました。

昭和五五年、それは東京オリピックの年ですが、その年の国勢調査のデータがあります。仙台は昭和五五年の調査データしかないのです。その国勢調査には、昭和三九年以前から仙台に住んでいる人の数を調べたデータがありますが、それが一三・六%でした。仙台は、八割以上が一六年前に来て住んだ人たちである。仙台市民というのは、そういうふうになっています。そう

いう意味では、東京とほぼ同じぐらいの移動率を持っています。一〇〇万人に対して、約六万人ぐらいが入って来て、また六万人が出て行くという、非常にモビリティの高い都市です。

その要因は、明治になって、ちよつと疲れた都市を再生するために、軍隊を持ってきたということ、学校を持ってきたことと、そして東北を管轄するための役所を持つてきたことです。軍隊、学校役所の三つ入隊して除隊をしていく、転勤をして出て行く、部署を代わっていく、という意味で、ショートステイ型人間の多い都市になっていったわけです。もともと明治の始まりの時に、移動性の高いところを都市づくりの基本にしてしまったのです。

戦後は、さすがに軍隊はなくなりましたが、仙台の事業所の五五%が支店経済です。東京なり大阪からの支店の転勤族が多いわけです。企業戦士に変わっただけと言えればそれまでですが、三年から四年ぐらいのショートステイ型人間が多い。ところが行政は、市民という住民票を出した人間のことでと考えると、いかにも昔から住民がいるように思いますが、実際には非常に移動性の高い都市が、すでに戦後においても起きています。これは推測ですが、そのうちの約三分の一から五〇数%まで、仙台以外の東北から来ている人たちです。

先ほどの小木先生の話に、東京の台東区に宮城県、福島県の人が多い、というお話がありました。ご存じのように東北各地は、嫌な言い方ですが、過疎だとかと言って、人口が半分とか三分の一とかに減っている所はザラにあります。過疎に指定されている所を全部地図に塗ると真っ赤になってしまふみたいな所なのです。そういう人たちにとっては東京に行く道と、もう一つは仙台でとどまる道とがあります。

私は大学で七、八年間、授業をやっています。学生は二五〇〜二六〇人です。その学生に「宮城県の間は？」と必ず手を挙げさせます。そうしますと、大体三分の一が手を挙げます。宮城県以外の東北五県はどのぐらいかという、大体三分の一です。残りが東北以外です。これは六、七年ずつと変わリません。その話をすると本論にいかなくなってしまうですが、そういう意味で非常にモビリティが高い所です。

■地元学

何代住まないといふ江戸っ子と言わないとか、三代住んだぐらいでは京都人だと言わないといいますが、仙台は五年住むと仙台人だとなってしまうのです。伊達政宗の遺跡があそこにある、というのを二つ三つ知っていると仙台通になってしまいます。そのくらい薄っぺらなという怒られますが、仙

台暮らしの仙台知らずというか、そこがどういう所であるかということ語る相手も、語る言葉も、語る内実も、資料もないような所で、そこに住んでいる人間たち、新しい人間でも、もしかするとここで終わるかもしれない、という人たちも関心を持つ。なぜか地価が東京に比べて安いせい、やたら家を建てる人が多いので、仙台はどんどん膨張していきます。家を建てて、「ここで一生ローンを払うんだなあ」と思う人は、「この町はどういう町なんだろう」と関心を持ちます。

新旧住民が混在しているのは、どこもそうでありますが、そういう人たちが集まって、「この町はどんな所だったんだろうか、この町にどんなことがあったんだろうか」を、お茶飲み話をして、それらを森さんのようにうまく書かないということを原則にして集めていったら、二〇〜三〇冊にまとまってしまったわけです。新田という、たんぼの所に出来た村とか、沼の周りの住宅とか、原の町とか。実は、陣内さんがこの原町に二、三年おられたのです。こういうのは、ある種の聞き書きなのですが、皆さんが何か言っているのを分らないからそのままメモをしてくる。誰もチェックする人間がない。私がチェックすることになつていますが、差別用語以外、一切チェックしないでやると、同じことがいつ

ばい書いてあるのですが、微妙に違います。つまり、曖昧な記憶を記録にしたというだけで、後世の歴史家がこれをやると、仙台の歴史は間違えらうなという危ない作業ではありますが、こういうのが出来上がる、と、妙に皆が喜ぶということが面白くなり、二〇冊、三〇冊と今なお続いているわけがあります。

そうすると、不思議なことに二〇〇世帯ぐらいしかない町なのに、三〇〇〇部ぐらいは出る。これは出版の常識から言えば、かなり多くの部数が出ているわけです。もしかすると陣内さんも、二年いたというだけではいいのではないのでしょうか。かつて二年間、親の転勤でいたとか、あるいはこの家の孫があつちへ行つたとか、嫁に行つたとか、親類がいる、兄弟がいる、どうだ、こうだという、大体二〇〇世帯の町に三〇〇〇〇〇〇ぐらいの關係を持つ人たちがいて、その人たちが実は買つてくれている。しかし、そこにかかわりのない人間にとっては、何の価値もないものなのです。

地域学というのは、そういうものとして受け止めているのです。それでよろしかろう、自分も二〇〇世帯のうちの一員として、原町と呼ばれたり、鉄砲町と呼ばれたり、何町と呼ばれようと、そこが良くなりたものだなあ、という思いは誰しも否定しな

いわけであります。行政は馬鹿だなあとか、何もしてくれないとかと愚痴を言うよりは、少しはこの町にどんなことがあつて、皆は何を考えているかということぐらい、茶飲み話で出し合おうではないかと。しゃべりつ放しだと消えますが、活字に残しておけば何事かになる。こういうのが三〇〇〇部ぐらい出ると、形あるものに弱いのが行政であります。そういう意味で、仙台でも「地元学は大事かもしれない」と、市長なども言うようになった。実は、そのぐらいしかコミュニティを考える施策を持つていないのが、我が仙台の行政だと言えるのかもしれない。

■東北を歩く

今日、私が述べたいのは、そういう仙台の半分ぐらいを占める東北から来た人々のことです。仙台市民とは誰かと考えたなら、この一〇年ぐらいにやつて来た、その半分はかつて東北にいた人である、あるいは三分の二がそうではなからうかと思つた時に、その東北から出てきた彼女や彼、あるいはじいさんばあさんが出てきたであろう東北の、三軒、一〇軒、二〇軒という小さな集落、それとの關係をどのようにしたらいいだろうか、という辺りを少し問題意識しながら、私は三、四年ウロウロと東北を回つて歩きました。

私も山形育ちなので、山形へ帰りたいたいと思うのですが、雪が深くても住めるような所ではないのです。でも、世の中というのは不思議なもので、「こんな所、誰も住まないだろう」と思う所に、かつては三〇軒の家があつた、今も三軒残っている。町役場は、山をどう下りないようにするかと随分頑張ってきたわけです。過疎対策として、とんでもない金を使つたけれど、やはり皆、山を下ります。でも、下りない人間が一分、二割はいるのです。下りないためにどうするかと考えるよりも、何でこの人たちは下りないんだろう、何が良くてこういう所にいるのだろうかという興味から、三、四年通つております。

私は毎週、二日か三日は、東北のどこかにおります。四〇〇自治体あり、ほとんど全部歩きました。道路という道路は、全部くまなく歩いたつもりであります。そこで出会つたばあさん、じいさんから、「これからどうやっていったらいいだろうね、ばあさん、じいさん」と聞いたらその返事はこうではなからうか、という話を申し上げて、私の地域学にしたいと思ひます。

■東北を生きる知恵

要するに、金もないのにその人たちが都市に出たのは、食いつぶげれないということもありますが、もっと良い暮らしがある

に違いないと思つて出て行つたわけです。良い仕事をしたい、もっと良い居住環境に住みたい、良い文化に触れたい。若い者であれば、良い学びの場を見つけないとなれば、山には学校は中学校までしかないわけで、高校は町場にありません。もっとよく学びたいと思えば仙台や東京に出るわけです。日本の学校というのは、良い仕事場、金のある仕事場に直結するような教育体制であり、若者の流出をどうするかなどというのはべらぼうな話であつて、構造上無理なわけでありませう。そういう若者をどう定着させるかという虚しい努力を、行政は宮々とやつていられるにも思えてくるのです。

先ほど言いましたように、残っているばあさんたちは、どうやつて暮らしているのか。金もないのに、条件的には非常に悪いのに、結構ニコニコして生きているのです。バブルが弾じてから、リストラに遭うとかで、うつむいて生きているような人たちが私の周りにもたくさんあります。その人たちに、「あまり金はなくても、ニコニコ楽しく生きていけるぜ」というようなことを、あのばあさんたちから、もう少し学ぶと、もしかしたら一年後ぐらいに私もそういう本が書けるかなと思つています。考えてみると、私たちは金があると安心だというふうに擦り込まれてしまつていられる。家計

簿なども見せてもらうのですが、「ようまあ」というぐらい。それでいて何か楽しそうである、これは何なのだろうか。

私は今日、東京に来るのに一〇万円持つて来たのです。でも、ばあさんたちは切符と一万円ぐらいあれば平気でしょう。私は一〇万円ないと不安です。この差なのだと思います。その辺を、未来に活かせるのではないかと思つていられるのです。若い衆は暗いようですが、金がなくても楽しくニコニコ笑つて、「ああ、いい人生だつたな」と言つて死んでいける。こういうことはなかなか悪くないぞという気がしまして、是非、足を運んで、じいさん、ばあさんに話を聞いてみたいのです。

今日は、歴史的な環境とか、歴史にアクセントが置かれていられるのですが、私は地理みたいなどころが非常に重要だというふうに思つてきました。あるいは自然と人間の関係といひましようか、実に自然というものを巧みに取り入れて暮らしている。

「どうしてばあさん、金もないのにニコニコ笑えるんだ」と言つたら、「いま財布に金があるなしではない」と。例えば「夏カシキに冬馬鍬」などということを言つてくれるばあさんがいるのです。夏カシキを準備しておいて、冬になったら春から使う馬鍬を準備する。要するに段取りをとつておけばいいんだということ。段取り

をとつて暮らすということが、山で暮らし、あるいは自然と暮らす時の基本スタンスだということなのです。

そう言えば、私は全然、今日も段取りなしであります。そういう時は狼狽えるわけですが、段取りが十分に出来ていれば、とりあえずニコニコの土台になるんだな、ということを感じました。さまざま段取りの知恵を積み上げていくといいのです。実は宮城県という所は、六〇〇も七〇〇もお米以外に産物がある。食いのものだらけであります。春夏秋冬、これでもか、これでもかというぐらい食いのものは出てくるわけがあります。食べ物とれる空間、その空間を冬から秋まで、食べ物とれる空間、その空間、取り込んでいく知恵がありまして、食べ物とれる自然空間と、自然を暮らして活かすということをやられるわけです。

例えば風のサイン、皆さんは台風がくると、気象情報を見て、災害が大変だろうというふうに思うわけでありませうが、天気予報の見方も全然違います。ニュースの見方も変わってきます。皆さんは「稲が倒れて、東北の人たちはお米がとれないで大変ね」と見るでしょうが、山のばあさんは、そういうニュースを見て、「ああ、イナゴがいるから、あそこのたんぼに取りに行こう」と思うわけです。このように見られるというのは、非常にたくましいです。

■地域という現場で考える

そういうものの土台を、私のいる仙台という町は危うくさせてしまった。危うくさせることで、あるいは切り棄てることで、都市というものになっていったのかなという気がします。あるいは東京的なものに近づいていった。それを残した所は、人口が三分の一とか五分の一に減ってはいますが、どうもそういう知恵とか段取りとか、そんなものを持っていた人々が、今なお過疎ではない、ほどよいまばらさだと言っているわけです。ほどよいぐらゐの過疎を、「適疎」というのだそうです。

そのように考えると、実は明るくなるのです。明るくなってくるところが東北のありがたいところだと、私はこのごろ思っております。なるべく仙台に來ないようにと勧めるつもりはありませんが、仙台は暗いものになぜ来るのだろう。それに対して、過疎を深刻に考えたがる行政、実は大して深刻にも考えてないのですが、「過疎をどうするか」などと、真面目に論じる人がおりますが、放っておいてくれと言いたいところなんです。考え方に、もう少し別の視点を持つてもらいたいというのが、地域学から言いたいことの一つです。

例えば、G A T T ウルグアイ・ラウンド対策で、農業予算を六兆数千億円にしました。そうすると、それが県に下りて、市町

村に下りて、区長さんに下りて、村長が「今度はおらの村の農業予算を何億にするぞ」とかという話をして、得々として「来年は俺に一票入れる」ということになるわけです。私が非常に仲良くなつたじいさんばあさん、その仲良くなる指標は物事の相談ということでありませう。「お前、時々来るけれど、何億とかという話は俺はよく分からないけれど、月々にして三万から五万円になるような仕事をこの村には作れまいかね」ということを言つて来るわけです。

役人は、何億何十億円というと、何か仕事をした気になっていますが、ばあさん、じいさんの側から言わせると、「この村に月々にして三万から五万円の仕事は作れないかね」ということに慮えられない農村計画とか、何とかプランナーというのは、失格だろうと私は思っています。そういう言語で、そういうところで、三万とか五万円の仕事を作ればそれでいいんだというのはなくて、その言葉に示される場所から、もう一度、地域に住む人たちの願いや期待を実現していく仕組みを、地域学というところから何か見つけられないものだろうか」と、私は勝手に思っているわけです。三万から五万円の仕事は何かと考えるのですが、「土方はきつくなつてきた」とじいさんが言う。公共事業は前倒ししすぎてもうない。農業年金があるから金には不自

由しないけれど働きたい。ただ、それを評価してくれる仕組みがないというところが、山のじいさん、ばあさんたちの訴えだと、私は勝手に理解しています。作物を作つても、町まで運ぶのをどうするとか、町が作った論理、規格を統一しなさいとか、L・M・Sの規格とか何とかみたいなことは言語道断で、これは間尺に合わないわけです。「町は何億円で話すかもしれないけれど、俺らは三万、五万円だ」と。そのところをどういうふうに受け止めるかということ、大事な視点ではないかと考えて通っています。

私の場合の地域学は、「記憶を活字にする仙台」と、こちらが教えてもらうことです。つまり、仙台も苦しくなつてきて、東京の方もそうかもしれないけれども、定年帰農とかといって、百姓になりたい六〇歳以上の方が六万人とか八万人いて、なかなか怖くて飛べないという人も含めると十数万はいるのだそうです。全国で毎年一八〇〇人しか若い農業者が出ない中で、六万人はすごいと思うのです。そういう人たちに對して「怖がることないからいらつしやい」と言えるような所、成仏するような所を是非、農山村に作りたいたいのだと、私自身もそこでお世話になりたいものだと思つているわけです。

市（いち）というものがありません。バザ

ールとか朝市とか夕市とか、そういう市です。秋田、新潟には、江戸時代から続く市が四〇以上あります。最近、農産物直売所が岩手辺りが四〇〇を超えました。バラックみたいな所にコンテナで持つてきて、えらい勢いで売っているわけです。と同時に、大型店などがあちこちにできましたために、人口一万人前後の町は、小売店はほとんどシャッターが下りていると言つていいでしょう。買物をするにも大型店に行かないと揃わないというぐらいに崩れているわけです。それをどうするかみたいなの話も、もちろん出ています。

■おばあさんの東京

金曜日の夕暮れ辺りが狙いめなのですが、パイパス沿いのトラックが行き交う所をばあさんたちが乳母車を押しながら、一群をなしてそろそろと一、二km先に急ぐのです。こういう姿をよく見かけます。何だろいかと思つたら買い出しであります。自分の生活の食糧を町が供給できなくなっている。肉屋も八百屋も、もちろん魚屋もないわけです。シャッターが下りているわけですから。みんなは車社会というけれど、全員が車社会にはまっているわけではなく、嫌な言葉ですが交通弱者というか、免許を持たない人はいっぱいいます。そういう人たちが一kmも二kmも先まで買物に行く。ばあさ

んたちが偉いなど思うのは、必ず近所で誘い合つて行く。女の人はやはり生き延びられるなど思います。

東北の町、四〇〇全部については判断できませんが、その中で年寄りが乳母車を引いて買物に行くようになった町は、なかなか見所のある町といえます。どうか、深刻な町であります。男というのは、どうして二人以上で群れられないのかと思つてますが、ばあさんたちは時々はお互いに頼みっこし合いながら、一km、二kmの道を買出しに出掛けて行く。つまり、大型店良しとして、町がたんぼを潰し、いろいろなことをやつたのですが、全部はカバーし切れていないのです。それをカバーするように、町の裏手のほうに小さな市ができています。そこが非常に良い場所であります。そういう場所を追つかけてきました。

環境という言葉は仙台市民は好きなのです。環境好きといえます。環境問題好きといえます。どうか、良い話題なのでしょうね。しかし、例えば、東北を宮城県で代表させると「環境」、「環境」といつても、何かよく分からない。議論はできませんが解決ができないのです。そのためには「環境空間」という言い方をしてもらいたいと時々言っています。環境空間というのは、自分の住む場所のことです。宮城県は、山林的環境空間が五八%、宅地的環境空間

が五、一%、湖もあり、滋賀県などはもつとすごいと思えますが、宮城県の場合は三五%が水辺的環境なのです。水路、川も含めたものです。農免道路がいっぱい出来たためか、道路的環境空間が四、一%、その他原野ということになります。二一%が生産緑地空間です。たんぼ、畑、果樹園といった所です。東北は、大体そのぐらいの比率です。

宅地的環境空間の問題というのは、大体、廃棄物処理の問題です。出した熱、炭酸ガス、ゴミ、産廃、あらゆるもの九五%が、おそらく廃棄の問題ですから、それを抑制するみたいにならなす。c.o.をどうするかといつたら、やつぱり抑制することに京都会議でなりました。水田のc.o.を酸素に変える力ほどのぐらいあるかというのを現在調査しています。あるいは、山林のc.o.を酸素に変える力を考えたり、水であるとか、いろいろな指摘がありますが、それは、実は健全でないと駄目だということなのです。詳しい議論はやめますが、そこにそういう営みがあつて、暮らしがあつてことによつて辛うじて保たれている、というのが現実であります。

原野、誰もいない所というのは、私も実は村がなくなつた所の出身なのですが、とんでもない猛威が襲ってきます。水害が起きたり、崖崩れが起きたりしてきます。手

つかずの森がいい、などという意見もあり
ますが、たいいていは人間が住むことによっ
ていろいろなもの保たれてきたというの
は、集落を調べられた方だったらどなたで
もお分かりだと思えます。そういう意味で、
もし環境を考えられるのだしたら、宮城県
で言えば二一〇プラス五八%のおよそ七
九%を占める山林的生産緑地空間というも
のをどうとらえるかということ。そして、
とらえるということ、そこに人々の暮ら
しが成り立っているがゆえに、実は保たれ
ているんだという視点が大事だろうと思
います。

そういう視点から、もう一度、農を業と
して成り立つとか、成り立たないとかいう
視点ではない、このごろはデカツプリン
グ、所得保障みたいな話が出ていますが、私は、
次の若い衆の仕事の場として、農業特別公
務員制度というのを考えているのです。地
域の福祉と地域の環境保全と地域の防災を、
農業をやりながらやっていく。農業が専業
として成り立つことは、日本の歴史にはほ
とんどないのです。何らかの兼業なのです。
しかし、これからの地域の福祉、環境保全、
あるいは防災の根底になるようなもの、こ
れらの主体の担い手をどうするかという問
題を抜きにして議論が進んでいるように思
いますが、それを制度的にやらざるを得ないだ
ろうし、それを今のばあさんたちに頼むわ

けにはいかない。

東北は日本の食糧基地などと言われてい
ますが、その食糧を生産する人、農業、漁
業の人たちの六五%は六〇歳以上の人です
から、推して知るべしであり、日本全体が
そうであります。都市の食糧もそうであり
まして、「おい、誰が賄うんだい」という
心配も出てきます。そういう視点から、百
万都市仙台で気持よく住むためにはどうす
ればいいのか。仙台は、かつて東北にいた
人たちが移って来て増えてきました。彼
らのじいさん、ばあさんたちがいる、そこ
との関連づけが極めて重要なのではないで
しょうか。仙台は、東北のそれらの町々に
何ができるかなどというと、六〇年代的発
想であります。そういう関係の学として
の地域学というもの、少し展開していく
必要があるのではないかと思つた次第です。
そういう人の姿を写真で紹介しながら、
話を進めます。

写真1 米沢は、福島との境にあります。
ここでは、いまだきめずらしいのですが馬
で木を運んでいます。この人たちの考え方
のすばらしいところは、物を生産するター
ムが、大体五〇年から八〇年ぐらいでい
るということ。機械化できない所が圧倒
的に多く、馬というものをたくみに操りな
がら、木を伐り出し、間伐をしている人た
ちがいます。この人たちが手にできるお金

は、前の時代の遺産であります。
写真2 木を伐ると、林の中が明るくなり
ます。光が当たって、木が大きくなります。
日本というのは、どうしてなのでしょう、
一〇〇年経ったものは高く売れて、七〇年
だと駄目だという、そういう馬鹿なマーケ
ットが多いのですが、その辺が少し変わる
と、この人たちも、もつと面白くなりそう
だという感じがします。



写真1

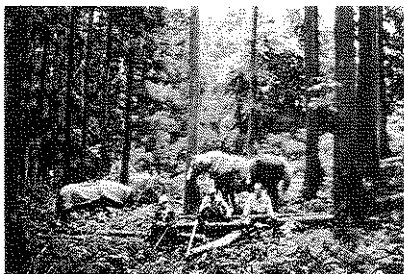


写真2

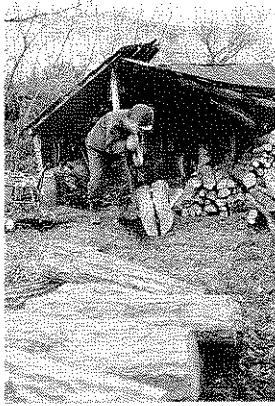


写真3

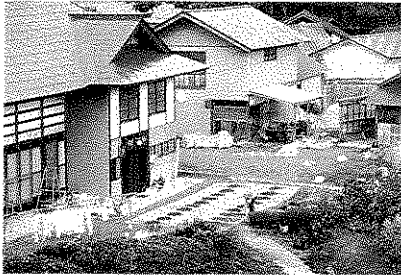


写真4



写真5

民俗学みたい、フオークロアみたいになりそうですが、そうではなくて、このじいさんたち、ばあさんたちの格好良さを本当は言いたいのです。「格好いいな」と思ってシャツターを切っています。

写真3 炭焼きの写真を撮らせてもらおうとすると、このじいさんは「やめてくれ」と言うのです。なぜかという、こんなになら、クヌギを大きくさせてしまった私が馬鹿だということを見せることになるからだ。二〇年前後ぐらいで伐るとひこばえが出てきます。山が再生し、木が再生してきます。それを四〇年にもしてしまつたのは、私が別のことにうつを抜かしていったと言うのです。農水省にだまされて、規模拡大をしたりしていた。だから、こんなものを割っている姿は、炭焼きとしては

本当はお見せしたくないという、この辺は江戸とはまた違う粹だと思っております。写真4 写真は会津の山都町という所のソバ屋です。何もしなかつたら皆、山を下りたのだからと思えますが、冗談から駒のような話なのですが、昔からお客さんのものもなしはソバですという人たちがいて、それを「まちおこしだ、やってみっぺいか」と誰かが言ったら意外とうけたのです。どの家もどの家も、みんな年がら年中ソバを打って食っていましたから、集落三六戸のうちの一五軒ぐらいがソバ屋を開きました。一人一〇〇〇人のお客さんがついていて、収入は三五〇万円です。これは副業です。そうすると、この荒れ地がゼロになります。たいてい山は荒れ地がほとんどですが、ここはそれがない。日本人という

のは、暇な人が多いらしく、どこでもうまいソバがあると食いに行くという人がいる。それで、そういう人たちに支えられています。

写真5 隣の村の孫、当時、小学校六年のサチ子ちゃん、やはりこの仕事にはまっているのです。もう三年ぐらいソバの収穫からソバ打ちまでをやっています。こういうのは地域学ではありませんが、改めて地域学なんて言わないで実地体験をしていて面白くなっています。技とか、いろいろなもの、が伝えられていく。この子には、私は何回か会いましたが、「私もここで良いソバを作って、ここで生きたい」と、中学生とは思えない発言をしています。いつか変わるのではないかと思ひ、あと四、五年は通い続けようと思ひています。「やっぱりお前、進学したか」と言ひてやろうと、それが楽しみでまだしばらく通ひ続けますが、古い流儀の良いところ、機械の良いところとをうまく組み合わせてやっています。

写真6 鋤が写っていますが、どこかの民俗史料館に収納されている鋤ではありません、現役です。この人は、十文字トシさんと言ひます。岩手県山形村です。いま一人暮らしなのですが、土地が二、三反歩あると、自分が食うぐらいのアワ、ヒエ、雑穀類は大丈夫だと言ひました。この鋤は

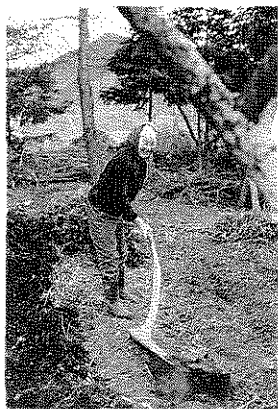


写真6

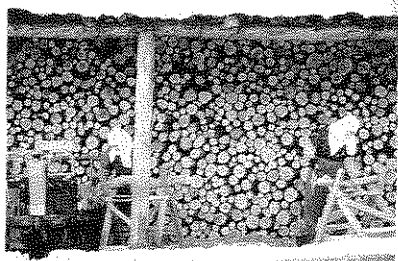


写真7



写真8



写真9

二五年ぐらい使っているものです。鋤というのは「フム」というのだというのも教えていただきました。何しろ、こういうもののほうが金がかからないということですから、金のかかる農業になってしまったのではないかとトシさんは言っていました。「私はこれ一丁で二〇年大丈夫だった、これからも大丈夫」と言っています。要するに、金のかからない暮らしということ、当たり前なのですが、この人たちから言われると「なるほど」と思うわけです。

写真7 私の地域学は、地域の人が持っている知恵を私が代わりに言っているのであり、学問でも何でもありません。福島の熱塩加納村という村で、シイタケづくりをしています。一人では嫌で、皆で共同でやる。シイタケのホダ木にドリルで穴をあけて菌を植えていくわけですが、大体一五〇〇本を二人で一日に植えるそうです。たいていこういう所に行くと、私は「あんちゃん」と呼ばれます。「あんちゃん、どこから来た」と。五三歳でありますから、あんちゃんと言われるとちよつとムツとくるところもあるのですが、相手は七五歳ぐらいのばあさんでありますから仕様がな、私のお袋たちと同じ年代です。写真を撮る人間のことを、「あんちゃん、気楽でいいな」と言う。「写真撮って字書いて、飯食えるのか」と言われます。立ち直るのに一、二日かかるわけですが、最近は大いに平気です。

写真8 山形県温海町での焼畑ですが、これはなかなか合理的であります。三〇年か五〇年ぐらいのタイムで耕地を利用していきます。カメラが燃えそうに熱かったです。手元を持っているのはママレモンの容器です。火があちこちにいけないために、容器に入っている石油をヒョッヒョッとやるわけです。良い道具であります。これがないと火が暴れるそうです。焼畑をやったら直ぐ種を蒔いて、二、三日中に雨がサアッと降ると、五、六日後に芽が出て、それがうまくいくと良いカブラができるそうです。カブラを植え終わると、今度は木を植え始めます。木を植えて、カブラを作って、何をやってという長いサイクルがあるわけです。

写真9 写真にありませんのは、バツタリです。鹿威しの大きなものと考えてください。水がチョロチョロと流れて行くと、これがボタンと落ちます。水車は水量のある程度、平場の所にありますが、山のて

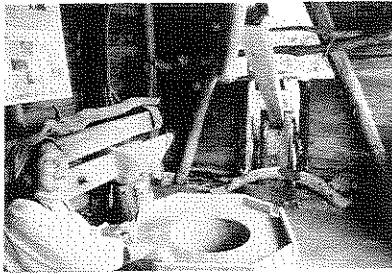


写真10



写真11



写真12

つべんのほうには水がチヨロチヨロしかいきませんので、バッテリーが活躍します。写真10 水がザアツと流れてバッテリーとします。反対側に白があり、ドツと落ちるわけです。コメツキバッテリーというのは、ここからきています。横から見るとバッテリーがヘコヘコしているみたいな感じですが、これを使うとエネルギーが要らないのです。この水をまた別のバッテリーにやりながら使っていく。これに金属とかハイテクを使い、ソーラーや風力と合わせると、地域エネルギーの八割ぐらいは賄えるのではないのでしょうか。

そういうことを仕組みとして今、中山間地にどう埋め込んでいくか。それをしないで原発反対とは言えない。電力会社からも二、三割は電気を分けてもらうが、「俺の

所には自前の電気があるぜ」というのも、これからの地域の生き方ではないでしょうか。「あれは危険だから反対だ」というのは分かりませんが、それに代わるものを自分の中にどう取り込むか、自然エネルギーをどう取り込むかということ、こういう人たちから指摘を受けるわけです。

私の友人たちには、「原発は危険であるがゆえに問題だ」という以上の意見はなかったわけですが、「これでやると、風速3mでも何キロワット出せる風車がこのごろ開発されたらしい」ということを、新聞も配達されないような所に住んでいる人たちがよく知っています。

写真11 福島では、荒れたたんぼに出てくるものでムシロ編みます。藁ではありませぬ。因幡の白ウサギの大黒様に出てくるも

のです。冬中、何をやっていたかというのと、寝ていたわけではなくて、春に使うムシロを編んだり、段取りをしていたわけです。写真に写っているような季節になると、ゼンマイが出始めるので、ムシロを干して、編んだムシロのガサガサしたところを太陽に当てて、ツルツルにして、その上でゼンマイを干すということです。

金がないのにどうして品がいいのだろう。風体は悪いのですが、何となく品があるというか、時々じいさまなど哲学者のように見えてくるというのは不思議であります。

写真12 標高八〇〇mの棚田を七年間、追いかけています。今年もまた植えてくれました。それが楽しみで通っています。あつちが死ぬか、私が諦めるか、どちらかだと思いのです。

こうして植えてくれているので、下の棚田も大丈夫、その下も大丈夫という、水の連鎖になつていっています。

写真13 場所によって違いもありますが、大間とか下北半島ではいいコンブがとれます。青森の東通村は太平洋側にありますので船は出せませんが、根が切られて流れつく流れコンブを拾って暮らしています。それが少ないと「やっぱり今年は出稼ぎかもしらん」というじいさんがいます。

写真は流れコンブを拾って家に帰って干すばあさんです。背筋がピンとしているの

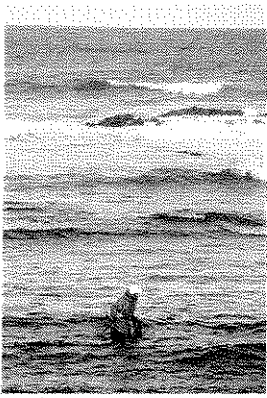


写真13



写真14



写真15



写真16

がいいなと思います。後ろから見ると若いのですが、おばあさんです。やはり、海辺で、波が出たなと思えばそこに行き、コンブが流れるはずだとちやんと判断して、それだけの分を拾えるその判断力、つまり自然を見る目といひましようか、判断する力は、見事だなと思いました。

つまり、地域学というのは、知るところこの大切さが含まれていると思ひますが、私たちは仙台暮らしの仙台知らずどころか、自然大切の自然知らずというふうに思ひます。

写真14 津軽半島の十三湖では、資源管理型漁業でシジミ漁をやっています。共同で、お互い約束を守る、抜け駆けをしない、人よりも多く捕りたい気持を抑えるということです。この場合は、かつては百数十人がいて、捕れるだけ捕ってよかつた時代に乱獲になり絶滅しました。それで、また稚貝を買って植えて、捕る量を二〇〇kgに制限し、三年後に一五〇kgに、いま七〇kgまで落としましたら、コストが安定してきました。そのことよつて、若い衆が現在二七〇人、この湖で漁をやるようになりました。つまり、生産に関する新しいルールとマナー、市場が考へる値段ではなくて、自分たちが自然からもらう量を、その地域の人間たちが合意していくことよつて、ほとんど一人もいなくなつたシジミ漁が、いま二七〇人に増えている。そして、どの家もシジミ漁だけで四〇万円の収入を得ることができるようになつた。そういう知恵みたいなものも、これからの地域を考へていくときに大事な視点かと思ひました。

このように写真を紹介しますと、私は好んでばあさんを撮つてはいるように思われませんが、そういうわけではありません。働いているのは、実はじいさんとばあさんだということよつていたわけではあります。若い衆はどうしているのでしょうか。一家の大黒柱は何をしているのか、パチンコをしているのではないかと私は思ふのです。そう考へないと、東北各地の農山村に林立しているあのパチンコ屋の建物は理解できないわけではあります。

写真15 小川原湖ではシジミ漁の夫婦舟が見られます。ここでもまた明るい展望が開けています。資源をきちつと、自分たちのルールとマナーで見つめています。

写真16 ホツキ漁をしている鈴木さんという人に、「資源管理型漁業とはどういうも

のだ」と聞きましてら、「そんな難しいこととは分からねえ、俺の孫もやれる漁業のことだ」というふうに言っておりまして。ルールはどういうことかといいますが、例えば、マンガというもので引きますが、その引くスピードを三分の一に落とすと貝を壊さないで済むとか。以前の漁師は、ビールや酒を飲むと、ピンを簡単に海に投げました。今は、缶一つ投げると一週間操業停止になります。それを全部合意していくわけですから。ここではこれが終わると刺し網があって、シヤコがかかるのですが、とんでもないゴミと一緒に網にかかってくる。「俺たちの仲間に、この海を汚す奴はいなくなっただけで、汚れが全然おさまらないのはなぜだ、上流から、仙台から流れてくるのではないか。そのことをお前はきちっと

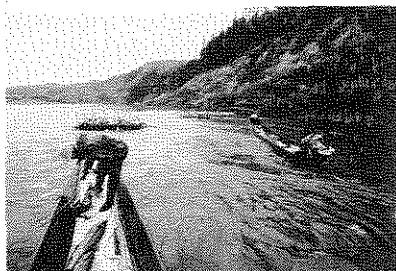


写真17

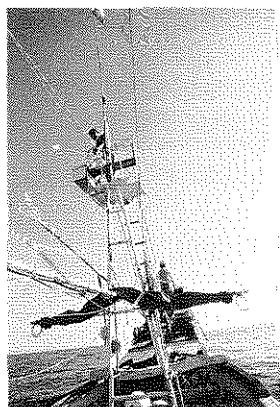


写真18



写真19

取材しなさい」と諭されました。写真17 最上川の支流の鮭川では、七人の川漁師がいます。全員趣味といってしまうか、食べるための漁をしているのです。漁業権はもちろんあります。お互い、ルールを守って、分け合っています。一匹多めになると、一応台帳は作りますが、ご近所に全部配っています。頭から骨まで、全部食べる食文化、多彩な食文化があります。これだと魚は、たくさん捕らないでいい。そうすると、網のかけ方が疎らになります。上流にも約六〇人の漁師たちがいますが、ちゃんとルールを守っています。ルールやマナーというと、非常にイージーな言い方になります。その大切さみたいな、法律よりも大事かもしれない、予算よりも大事かもしれない、そんなことを教えてもらっ

ています。

写真18 突きん棒漁をする人たちは格好いいのです。漁師と漁船員とは違います。漁船員は給料、漁師は捕れただけです。一二時間ぐらい、三陸沿岸沖合い二〇kmぐらいをずっと上がって行き、カジキが飯を食って眠くなつて上に息つきに上がった瞬間に鉞を刺すという漁業です。動物保護団体は残酷だと言うかもしれませんが、一網打尽ではない、人が魚と向かい合ういちばん良い漁だということを教えてもらいました。年間一〇〇万円ぐらいの油代で済むそうですが、なかなか良い漁です。

写真19 今日の話には関係ないのですが、大漁旗をお見せします。田舎者でありますから、「格好いいでしょう」と自慢したくなるのです。これがへんぼんとひるがえって出て行き、へんぼんとひるがえって帰って来ること、それが浜の共通の願いなのです。

写真20 秋田県の花輪の市(いち)では、写真のようにこんな姿が見られます。風呂敷を背負っているからといって、ここがチベットとかブータンだと思わないでください。この写真は古いものではなく、ここの二年のもです。

歴史民俗史料館の写真にあったのではないかとわれそうな籠も、現役で見られます。卵や野菜を買って入れます。籠は、い



写真20



写真21



写真22



写真23

ちばん背にびったりで、両手が空いて背負いやすいそうです。

最近、ばあさんたちがバイパスをショッピングカートを引いて歩いている姿が多く見られます。五人、一〇人、二〇人と集団をなして行く。その後ろ姿を見ると、時々考えこんでしまうわけです。日本のまちづくりとは一体何なのだろうか、いろいろ考えさせられます。このばあさんたちに「どういうふうなのが良いんだ」と聞くと、「あんちゃん、若いな」と言われそうでありすが：

写真21 タクシーで市にやつて来たりもします。なぜタクシーに乗ってまでやつて来るのかといえますと、それは、市には話相手がいるからです。ばあさんは、市に買物だけに行くわけで

はありません。自宅の前庭の野菜畑でとつたものを、腰掛けている箱の下に入れていきます。この箱二つを持ってきて、四、五時間おしやべりをしながら売り切ります。手に入るお金は四〇〇〇〜五〇〇〇円あるかどうかだと思えます。二〇〇〇円も売れたら、あとは売らなくていいわけです。今日の目標は達成する。あとは、もう延々としゃべるのです。こういう場所があるから元気だと言っていました。このことは厚生省がよく考えなければいけないテーマだと思えます。

写真22 市では、朴葉でお赤飯などを包んでいます。「どこにある朴葉か」と聞くと、家の前にある朴葉であると。地球にやさしいなどは全然言いません。エコロジストは考えなければいけないことです。

岩手県山田町のじいさんは、「市の前日は寝られねえんだ」と言っています。八時ぐらいから開くのですが、五時ぐらいにはもう来ています。山に入って竹をとって、籠を編んで売っています。私はいつも自慢を聞いています。じいさんは、本格的に竹の子をとる、茸をとるといふ人には、ピニールの籠のほうを勧めます。会場の皆さんは、きつと竹の自然素材にひかれると思うのですが、「自然素材は駄目なんだ」と言います。

写真23 ばあさんたちが集まって、種苗交換会をします。自家採取の種です。日本の農業のいちばん危ういところは、種を大手商社、種屋に牛耳られたことで、自家採取ができなくなつたことです。このことは、遺伝子組替え以上に深刻です。こういうば



写真24



写真25



写真26



写真27

あさんが教えてくれるのは、種の重要さであります。パックに入れたり何だりして、それをうまく植えたとか情報交換をする。「じゃあ俺は今年やつてみよう」と、こういう情報交換の場としての市、こういう側面が本来の市だと思っています。

写真24 山菜の売り方も、だんだん人の暮らしに合わせていきます。一山いくらという組合せが実に妙なのです。二〇〇円であれとこれとこれと買えるという。あのばあさんだったら、これとこれがそろそろ切れるころだということが分かるのです。面白いものだなと思えました。キャベツ三個は要らないから、こっちのゴボウ二本と取り換えてくれと言ったらもちろん取り換えられる。そういう融通の利く場がよろしいですね。山菜を売っている手前にメイנסト

リートがあるのですが、ここは人つ子一人通りません。その裏には、人で溢れている市があります。わずか四、五時間の間ですが、そこだけはワイワイガヤガヤと、「ああ、こんな町になつたらいいな」と思わせられる空間なのです。

写真25 秋田の五城目町に、金谷チヨさんというばあさんがいます。五城目町は月に一三回も市を開いています。こういう市をやっているがゆえに、このばあさんは元気なのです。市に出ない時は食欲がないのですが、市に出る時は、土方弁当をまず市に來てから食べて、朝五時ぐらいから夕方の三時ぐらいまで、ずっと売っているのです。寒さも気にならず、「ここに来ると元氣が出る」と言います。市に通って、私もいろいろと分かりました。

写真26 このようなことがだんだん仙台に伝播してきました。仙台は、市がほとんどありませんので、仙台の町中に、こういう人たちに來てもらいました。そうしましたら、やたら町場の人たちが喜びました。ざまあみると思っています。

写真27 東北という地域を考えていくときは、冬をどう越すかということは、大きな問題です。写真は、山形の大蔵村です。積雪のため、二階から出入りをしているのですが、顔はにこやかです。別に笑えと言ったから笑っているわけではなく、「お前、よく来たな」と呆れているだけです。雪が四mぐらい積もっているわけですから、行くほうも行くほうです。このときは、「まあ、泊まれ」と言われて、大変いい思いをしました。



写真28

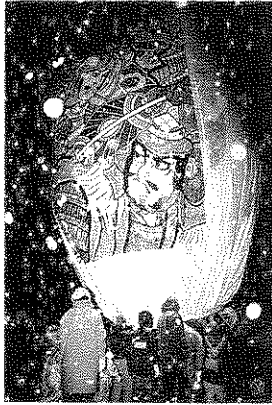


写真29



写真30



写真31

写真28 写真でお分かりのように観光客は誰もいませんが、山形の西川町の大井沢での行事です。山の神様が春になって田の神様になる前に、一軒一軒の家を回って歩きます。子供らはお賽銭をもらったりします。これが山の神様ですから、ここにお餅とお賽銭を入れてもらうのです。リュックサックがいっぱいになって、それを山分けにするわけです。こうやって子供らがグルグル回ると、人のいない家、一人暮らしのばあさんの所、つかい家族、暗い顔、喜怒哀楽などいろいろ見る機会があるわけです。子供地域学だなど思ったりします。

最後に手拭いのところに火を放つと、フワツと上がっていくわけです。気流がありますから、天の川のようになって、一〇分ぐらいすると冷えてきて消えるわけですが、それを皆でみます。集落のみんなで、チームをつくり、チームで作った紙風船を冬の夜空に一〇〇個ぐらい、一分おき、二分おきに、今はバーナーで火を放ってあげています。この祭りは一〇〇年以上の歴史があります。

灯籠流しのお空版といったらいでしようか。私などは、「銀河鉄道の夜だ」などと言って女房に蠶躰を買いました。「そんな文学的なものじゃあるまい」と言われましたが、でもまあ、なかなかのものであります。

大したものじゃないか東北は、と私は思

うわけです。大阪もすごいなと思いましたし、東京もすごいけれど、東北だって大したものじゃないか。人の数が多いから大変だとか、少ないから大変だとか、そんなこと言いなさるなど、そんなことを思わせてくれる祭りであります。

写真30 廃校がたくさん出ています。それを、自分たちの場所にしようという動きが、東北でいくつも見られるようになりました。町の人たちを呼び、役場から建物を買い上げて、管理は自分たちがやることにして、新しい学校を始めています。写真は金山小学校谷口分校の開校式です。

写真31 自然を知る学びの場、これはいろいろな所にあるかと思いますが、それを集落の人たちが主体的にやり始めています。こういう場所を設けると、ばあさんが「俺



写真32



写真33

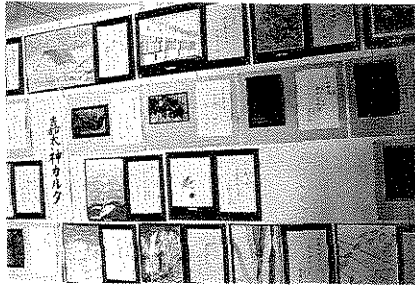


写真34



東北むら紀行「山に暮らす 海に生きる」
結城登美雄 著

もソバを打つてもいいかな」と言つて、ソバを打つて金儲けをし始めます。うまくも何ともない、安くもないのですが、なぜか知りませんが木造校舎のせいとか、遠くから客が来ます。ばあさんたちは、農業があるために土曜、日曜の一時から二時までしか営業しない、生意気なソバ屋なのですが、土・日曜日には一五〇人ぐらいのお客が来ます。不思議な時代になつたなという気がします。学校でやるから「がっこソバ」と呼んでいます。そこらはちよつと大阪と似ています。やり方とか名前の付け方がイージーです。それはそれで大いに結構だと思います。

の教師が五〇人も六〇人も生徒の面倒をみきれぬわけはありません。分校は一〇人です。一〇人の子供を四人の先生が見るのでありますから、親のことまでみんな見えてしまつて困ると先生は言っています。良い学校です。効率が悪いからと切り捨てるのではなく、今もし学校も子供も行き詰まる問題があるとしたら、こういう分校の営みみたいなどころから、もうひとつ次なる姿を見つけてはできないものかと思ひます。

写真32 学校は行き詰まつとか、いろいろと言われていますが、あれは生徒数が多くなりすぎたのではないかと思ひます。一人の教師が五〇人も六〇人も生徒の面倒をみきれぬわけはありません。分校は一〇人です。一〇人の子供を四人の先生が見るのでありますから、親のことまでみんな見えてしまつて困ると先生は言っています。良い学校です。効率が悪いからと切り捨てるのではなく、今もし学校も子供も行き詰まる問題があるとしたら、こういう分校の営みみたいなどころから、もうひとつ次なる姿を見つけてはできないものかと思ひます。

写真33 この学校は、中山間地ですが唯一の広場があります。夜、運動会の練習をここでします。

写真34 地域を見詰める。子供たちも、実は自然など見えてない、地域も見えていない。ただ、自然のカルタを作ろうというこゝでやってみると発見があり、見えてくる。それを心ない人が折つたり盗んだり、ゴミを捨てたりすると、子供らもカチンとするとこゝろがあります。そこから自然とは何か、地域とは何か、誰が植えたんだとか、何だかんだと考えるようになる。そういう地域の小さな営みがカルタになつていきます。そういうところから、ここよりは仙台、仙台よりは東京で暮らすほうが良いのかもしれないという道だけではない、もう一つの道を示している地域学でありたいと思つた次第です。



■地域雑誌「谷中・根津・千駄木」

橋爪さんが大阪からいらつしやるということで、ご一緒に「世紀末（いまどき）盛り場考―『にぎわい』の新風景―」（日本経済新聞社）の本を書いたりしたものですから、今日は楽しみだなと思っていたわけです。東北学は、仙台から結城登美雄さんをお呼びしましょうと私が紹介しましたので、それで私の役目は終わったという感じがしています。

私が師匠と仰いでいる結城さんのお話を東京で皆さんに聞いていただけただけで、私は本当にもう満足しています。師匠のPRをしますと、秋田で有名な一生懸命仕事をしている無明舎出版から本が出ています。「山に暮らす海に生きる」を読んでいたけど、今日のスライドの写真などもみな入っていると思います。

私は、一九八四年、今から一四、五年前ですが、東京の文京区と台東区の狭間の所

で、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」という小冊子を創刊いたしました。最初は八頁に表紙がついただけの、一〇〇円の簡単な冊子だったので、二号目から三二頁になって、六号目で四〇頁になって、いちばん多い時は六四頁ぐらい、A五判、オフセット、モノクロ、季刊で平均四八頁ぐらいの非常に簡素なものです。

私は東京全体に責任は負えません。ですから、自分の地域について話をします。台東区というのは、すごく安易なネーミングで、上野台よりも東という意味でつけた名前なのです。昔は下谷区と浅草区だったのですが、それが一緒になって台東区になった。文京区というのも安易で、東京大学をはじめとして学校がたくさんあるし、文京区となったのです。昔は本郷区と小石川区という、非常に歴史的な名前を持っていたのが、合併して文京区となりました。

ここは、それでも四〇〇年の、いわゆる開府以来の歴史があるわけです。その前に江戸も、もちろん人は住んでいたわけですが、文書史料というのは、それ以前のは非常に少ないです。私たちの地域は、江戸の開府、天正一八年に徳川家康が、江戸お打入りと言われて入ってきた時、東のほうは見渡す限りの茅原で、西のほうは雑木林があったという、そういう寒村だったという事です。私たちの地域は、最初に上

野の山の台地の上に、藤堂、溝口、堀という大名屋敷ができてから、それを動かして、天海僧正が徳川幕府のため、比叡山延暦寺にならって東叡山寛永寺というお寺を造りました。これが、地域の歴史にとつてはとても大きかった事件です。

いまの上野公園は、大体その寛永寺の跡なのです。不忍池を入れますと三六万坪ぐらいが寛永寺です。不忍池は当時の今の倍ぐらいの広さはあったのですが、だんだん縮まってしまったわけです。寛永年間のころにお寺ができ、少しずつ町屋もでき、谷中辺りに寺町が形成され、本郷の台地の上には大名屋敷や旗本屋敷がおかれ、といったように、江戸の中では、わりと早くから町が成立していました。

今でも国際金融中枢といわれる大手町まで地下鉄で六分という所です。近代になってから東京は大きな二つの災厄にみまわれました。関東大震災と戦災です。でも、私どもの町は焼けなかった。全く被害に遭っていないと書くと嘘になりますし、怒られたこともあります。というのは、人が随分亡くなっているのです。爆弾が落ちたりして、一挙に防空壕の中で四二人とか、二〇何人とか亡くなったこともあります。三月一〇日ではなくて、三月四日が被害が多かったです。でも、意外と焼けなかったのです。それは、当時の近隣組織がしっかりして、

頑張つて消し止めたと皆さん自慢される。近くにあった不忍池の水などを汲んで中継送水したり、上野の山の緑地もあつて延焼を防ぎ焼けなかつたわけです。

それで古いものがたくさん残っていたのですが、ここで生まれた私自身にとつては、自分が子供の時の自己認識としては、とにかく近代化に乗り遅れた冴えない町だ、というふうに思っていたわけです。これは、皆さんそうおっしゃっていました。ほかの町が東京オリンピックを境にどんどん道が拡張されて、青山など、きれいになつてビルができていく中で、私たちの町はまだ都電がコトコト走っていて、両側に商家建築勾配のきつい瓦屋根の商家がずらつと並んで、全く変化がなかつたわけです。それで近代化に遅れたとか、冴えないとか、発展性がないとか、古臭いとか、そういうイメージが、非常に強くありました。

私が一九八四年にこの雑誌を始めたのは、学校を出てから都心の出版社に勤め、結婚して子供を産んで、もう一度自分の町に帰つてからです。その時に、その古ぼけた冴えないと思つていた自分の町が、わりと新鮮に見えて、とても面白かつたのです。人間は、大人になるに従つて、行動範囲も広がつて、自分の町をしつかり振り返ると、A地点からB地点へ走つていく。私なども、

学校や会社にとにかく遅刻しないように走つていくという生活では、町は見えてこなかつたのですが、子供を産みますと、ベビーカーに赤ん坊を乗せて歩くというペースで町を歩くようになります。子供に話しかけながら、「ああ、こんな所にこんな大きな木がある」とか、「ああ、まだ木の電柱がある」とか、「お稲荷さんがある」とか、「あれっ、何でここにこんなものがあるんだらう」というふうに思い始めました。また、子供がヨチヨチ歩きになると、興味津々の生きものですから、町の角という角を曲つて子供はどこかに行つてしまう。現在、スタッフ三人で子供が一〇人おります。ゴチャゴチャと集団保育というか、育てているのですが、三、四人連れて歩いていて、四つ辻に来ると、もう三方に散つたりして、どの子を追いかけていいか分からなくなつて、子供を迷子にしたりするので、それで始めてわかる町もあります。

私は、三〇年近く暮らしてきた自分の町に、こんな知らない所があるのかとびっくりしました。一見、お屋敷町のように見えても、本当はその奥の路地の、更に奥のアパートに住んでいる人のほうが人口としては多いのです。無作為抽出で調査のアルバイトをやったことがあります。担当したのはお屋敷町だったので、結局、調査の対象者というのは、大体はアパートに住

んでいる人なのです。そういう奥とか、路地の中とか、見えない所に住んでいる人が多い。それはすごく面白い体験だったので、私は自分の町に興味を持ちました。

最初から資料とかテーマが決まつて始まつたというよりも、何となく町を歩いていく体験的なことから面白さが発生して、それが何なのだろうかという意味を調べるときに、誰かに聞いたり、図書館に行つて調べたりというふうな、後で資料を探す形です。ですから、「幼児の砂いじり」というように言われています。何かお砂場で砂をいじっているみたいな感じで、あまりはかがいがないわけです。ただ、そういうふうになっているから、最初から非常に効率的に、このことはここに聞けばいい、あそこの資料を見ればいい、というのだと見えてこないような周辺資料とか、周辺の人々の動きとかが全部ゴチャゴチャになつて入ってきます。そういうのが一つの地域学かなと思います。

■地域学と郷土史

もう一つは、郷土史と私たちのやつていることには違いがあります。私たちの場合は、調べることにそのものに興味があるというよりは、やはり、どうやったらここで楽しく、より良く生きていけるのかというところがある。もう一つは、郷土史というのは、

過去のものを過去のものとして、お寺の文書ですとか、山門の由来ですとかを調べていくことが多いわけですが、私たちはそうではなくて、いま生きている人にとって、その土地の歴史は何なのか、ということ調べていきたい。

だから、やはり皆にいちばんつながっている話、「あなたがいま住んでいる家には、百年前には祈禱師が住んでいたんだよ」とか、「蛇屋さんがあったんだよ」とか。それだと皆が「へえっ」と言うわけです。あそここのアイスクリームは、こうこうこういうアイスクリームだとか、あそこは、日本で初めてアイスクリームを作った店だとか言うのと、皆が「へえっ」と言う。この「へえっ」というミーハー的な驚きというのを大事にしなから、それを雑誌に書くことによって、皆に地域のことについて、もっと興味を持つてもらおうという、そういうスタイルです。

■「谷中・根津・千駄木」の誕生

最初に始めるとき、どんな雑誌を作ったらいいかというのを今から一五年前、イタリアから戻られたばかりの陣内先生に、図々しくもご相談にかがいました。誰かが「それなら陣内さんに聞くのがいい」と言われて、いまでも忘れません、紀伊国屋書店の裏の喫茶店に呼び出してご相談したのです。

その時に陣内先生がおっしゃったことは、いわゆる建築学の調査は、間取りをとったりするのは多いけれど、もっと学際的にやりなさい。被服とか食物とか、特に女性だから産育とか、そういうことも聞いたら面白いものができるのではないか、というアドバイスをいただいで、それにすつかりのせられて雑誌を始めてしまいました。

その時、自分たちだけでは心もとないで、「谷根千生活学校」というのを作りました。近所の主婦の人たちが集まって、いま思えば、子育てサークルの前身みたいなことをやったわけです。例えば、子供に無添加のおいしいおやつを作るにはどうしたらいいかといったことを、近くに栄養学校を出た人がいて、その人にそういうのを教えてもらいました。その後、みんな子育てとか、この町の公園がどうなっているかというような話をしたりしました。年末には、誰かが着物の着付けの資格を持っているというので、「この町はやつぱり正月は着物で歩かなくちゃあね」というので、みんなが集まって着物の着付けを習って、その後またお茶飲み話をしたりしました。その人たちは、本当に私たちの雑誌の良好な応援団になってくれました。

同時に「谷根千生活を記録する会」というのを作りました。これは研究の別働隊になっていただいで、一緒にいろいろな特集

や雑誌を作っていく仲間にしようと思ったのですが、一〇年ぐらいたって全く駄目だということが分かりました。ほとんど動いていません。「谷根千ファンクラブ」みたいになってしまいました。おんぶにだっこで、何か案内して良いところを見せてもらえるという感じで来る方が多くなってしまうのです。それも大事なことです。私たちはたいへんくたびれて、ガイドばかりしているみたいになつたので、やめてしまいました。

■「谷中・根津・千駄木」の読者

現在は季刊で大体一万部近く刷っており、実売ですが、三〇〇店ぐらいのお店に置いてもらっています。こんなもの、関係のない人には全然面白くないだろうと思っているのですが、私たちの雑誌は、全国で五〇〇人ぐらいいは郵送の読者がいます。その読者は、昔この町にいたという人「OB人口」、また、お墓参りに来て地域内の人以外で買ってくれる人は「お檀家人口」と私たちは言っています。地域に一〇〇ぐらのお寺があつて、そこに小さい時からお彼岸やお盆でお詣りに来る。いつも来ると、あそこのお煎餅屋さんでお煎餅を買うとか、佃煮を買うのが楽しみで、そのようなときに、レジの脇にある「谷根千」をみつけて、買っていただくという人たち。

この前も、五万円もカンパをしてもらいました。この人は、谷中墓地にお墓を持っている方で、「私はそのうち、お宅の町の住人になるので、いつまでも子孫がお墓詣りに来た時に良い町であるように頑張ってください」という手紙をもらったのです。その他、こういうまちづくりや地域史に興味のある自治体の方とか、いろいろなまちづくりをやっている方が読んでくださっています。

■聞き書き編集

普通のタウン誌とは違います。タウン誌というのは、何かもくろみがあつて、宣伝したいとか、これからこの地域を再開発したいというデベロッパが出す場合もあります。まずし、印刷会社がやる場合もあります。大体がパトロンとか、バックに暖簾会とかが付いていて、情報を上から出していく。「うちの店に來なさい」というような感じなのですが、私たちの場合は、基本的には双方向といえますか、水平のコミュニケーションというのを大事にしているつもりです。ですから、もし、おいしい店を紹介する場合でも、自分で身銭を切つて、食べて納得すれば書く。常連さんが多くて、書くのと迷惑するようなお店については書かない、ということにしています。自分の意見を言うのではなくて、そこに住んでいる人々の

意見を載せる。原稿を四枚書いてくださいと言つても、絶対に町の人は書いてくれませんから、そういう時はこちらから行つて、お話を聞いたものをまとめるということにしています。

倉沢愛子さんという、軍政下のインドシナの農村研究で業績を上げられた方の本を最近読みました。彼女はそれを調べるためにジャワの農村に入つて話を聞く。テープレコーダーとカメラとタイプライターを持って、村から村へと渡り歩くのですが、そのころまでは、歴史学というのは、オーラルリサーチが認められていなかった。でも、史料といったものが残らない対象については、話を聞くしかない、というふうに書いていらつしやいます。私も全くそういう感じがします。

町についての史料はほとんどないのです。例えば、盛り場のような、東京で言えば銀座とか新宿とか浅草といった所については、多少は『銀座文士交遊録』とか、『浅草芸人記』みたいなものがあるのですが、小さな町については、記録も史料もほとんどないのです。大体、どの区史や市史を見ても、私の見る限り区政史や市政史で、行政の公的な記録です。区議会の何代目の議長は誰だったとかいうことは分かります。いついつ予算ができて、この道が拡幅されたとか、水道が引かれたとかいうことは分かります。

しかし、そこに住んでいる実際の人間がどう感じていたとか、喜んだとか、悲しんだとか、何でここにこんな店があるのかというところが書かれているものは、ほとんどないような気がします。ですから、私たちも、オーラルリサーチをしていくしかないわけです。

倉沢さんの本で共感したのですが、話を聞くというのは本当に難しい。誰にでもできることのように思うのですが、これはかなり技術の要ることだと思えます。しかし、その技術を最初から持っている人はいない。やはり、訓練していく中で技術を獲得していくものだろうというふうに思います。よく間違えることは、「昔はね」と言われると、「昔は」と、そのまま書くのですが、昔といつてもいろいろあるのです。その人が言っている昔が明治時代なのか大正なのか、戦前なのか戦後の初期なのかというところを、ちゃんと確定して、しつこく食い下がる。例えば、「その昔」というのは正確には、いつのことですか」というふうに聞き通すことが大事なのです。

■エピソード

大失敗をしたのは、酒屋さんの特集をやつた時に、昔はお酒を水で薄めて売っていた、みたいに取られかねないような流れの文章を書いてしまつて、その時は酒屋組合

から抗議を受けまして大騒ぎになりました。業界の信用問題だというわけです。しかたがないから、暮に皆で手分けをして謝りに行きましました。

「水で薄めた」の問題はいろいろと取材をして聞いてみますと、やはり本当にあつたらしい。それも、いろいろなのがあるのです。例えば、江戸時代に小僧さんなんかがお酒が飲みたくて仕様がなく、錐で穴をあけて、チューチュー吸って、減った分を水を足して埋めていた。これを、多摩川上水の水で割っていたというので、「多摩割り」というのだそうです。また、昔は原酒を持ってきて、店頭でブレンドした。今みたいに瓶詰めではないので、そのブレンドの仕方がご主人の腕の見せどころだったという話もある。

戦後、お酒をそのまま売ったのでは、原価割れになってしまうので、王冠をあげて何か違うものを入れて一〇本を一二、三本にして売っていた。この話は本当で、ちゃんと王冠をあげる機械まで残っていました。そういうことがいろいろあるので、昔といつてもいつなのか、ということを食べい下がつて聞かなければいけないわけです。

よく分かったことは、お店屋さんというのは儲かっている、と言われるのが嫌いです。でも、斜陽ですと言われるのも嫌いで、何と書いていいか分からない。大阪弁でい

うと「ボチボチでんな」というところだと思ふのですが、ですから、本当に真実をそのまま書けるかどうかというのは、厳しいところですよ。

単純な間違いもあります。今の主人がトモキさんとかいいう名前なのですが、それをもう死んでしまった先代のコウシロウさんと間違えて書いて、「今日もコウシロウさんはさつそうとバイクで配達している」などと書いてしまったものですから、町の人はその本を読んで「よう、コウシロウ」などと息子さんに声をかけたりして困ったというところもありました。

「うちの親父は外面が悪くて、一〇〇点満点で一五点だ」などとおっしゃったので、「一〇〇点満点でうちの親父は一五点」とそのまま書いたら、活字になるってこんなことだとは知らなかった。「ご先祖様に申しわけない」という感じで、怒られるならいいのですが、何かしよげちやって晩酌もできなくなってしまうのです。本当に私たちが申し訳なくて、次の号で「八五点の八が脱けました」という訂正を出したことがあります。

■地域に沈殿する地域冊子

地域史とか地域学を活字にすると、そこにいる人はたいそう傷つくかもしれないのです。例えば、テレビで「新婚さんいら

っしやい」などで派手に夜のことまでワアワア言っているけど、あれは電波で雲散霧消してしまうのですが、結城さんとか私たちのような地域の冊子は、家の宝のようにずっと残っていていくわけです。私たちの地域は、二万世帯ですが、そこに大体一万部入っているわけです。初めて取材に行ったところですので、『谷根千』だけバックナンバーがずらつと、仏壇の脇に並んでいる情景もよく見かけます。

それだけ地域に沈殿していく史料であり、言葉なので、あだやおろそかには書けない。人をけなしたりするのではなく、後味のいいというか、良いほうをできるだけ書きたいと思つています。でも、良いほうを書くのと、今度は違う所から苦情がくる。「あのおばあちゃん、きれいごとばかり言っちゃって、実は丁稚と駆け落ちしたのよ」とか、そういう話が入ってきますが、仕様がなかなどというふうに入っています。

普通に営々と生きていく普通の人というのは、自分のことが新聞や雑誌で活字になるところは、事件というか、手が後ろに回った時だと思つている人もあるのです。私たちの雑誌は、その人が長年に得てきた知恵とか知識とか体験というものを、ある意味で検証というか、大事だよということを伝えるために書いていますので、たいへい喜んでくださつて、本当に自分の号が出る

と三〇部とか五〇部とか買って、親戚縁者に配ってくれる方もあります。

また、亡くなられた場合に、その人が載った号を五〇部注文してきて、それをお葬式で配るとか、時には私たちが撮った写真が遺影になるとか、採ったテープがお葬式で流れるということもあります。また、定期購読をしているのだが、ある号がどうしても見つからない、送ってくれてないのではないか、という問合せがありまして、いろいろ調べてみたのですが、ちゃんと送っているのです。何日かして、先方から電話がありまして「おじいちゃんが亡くなる前にベッドでその雑誌を読んでいたので、お棺の中に入れたのです。こっちのミスでした」というお返事がありました。そんなふうに読まれています。

■特集方式

私たちの地域雑誌は、基本的には特集方式というのをとっています。それはなぜかというと、保存版にしてみたいという気持ちからです。一般のタウン誌は、連載ばかりで、それを見てもそんなに変わりがない。そうすると大体捨てられてしまう。大体、タウン誌とか地域雑誌はただでもらえると思っている人が多いので、そうではないんだということをお分かってもらいたいがまず大変です。とりあえず捨てられないため

に保存版にして、資料になるように作っています。

ですから毎回、特集をやる。一つは「生業に関する調査」をメインにしています。こう言うと堅いのですが、例えば、今号はおソバ屋さん特集とか、豆腐屋さん特集、酒屋さん特集、お米屋さん特集、質屋さん特集、石屋さん特集、こういうのをやっています。それはなぜかというと、さつきも申しましたように普通の人の生き死にを記録するという点からです。区史などには絶対には出ない。

取材する時は、シートをまず作って手分けをして行きます。まず創立、そのお店がいつできたか、初代は何という名前、何という屋号で、何でそういう屋号になったのか。どこから来た人なのか。その店に伝わるエピソードとか、印象的なこと、すごく嬉しいこと、辛くて嫌になっちゃったこと、そういうことを聞いてきます。それをまとめて、載せます。

それだけでは堅いので、例えば、豆腐屋さんだったら豆腐のおいしい食べ方とか、豆腐の引き売りにくくついて歩くルポとか、豆腐を自分で作ってみるとか、全部の豆腐屋さんの豆腐を食べ比べをする会とか、豆腐にかかわる文化的な知識とか、豆腐をうたった歌とか句とかも載せたりして、やわらかくして提供しています。

銭湯特集とか菓子屋さん特集とかをやりますと、大体読者はそれを持ってオリエンテーリングしてしまうのです。端から行っている読者が多いので、ご商売にもプラスの面があると喜ばれています。私たちが広告以外一銭もお店からお金をもらったことはありません。

もう一つは、ランドマーク的なことといえますか、町の人が皆、共通の思い出を持っているようなものの特集というのがあります。例えば、初期の三号で藍染川という都市の中小河川について調べて載せました。老人会に行つて耳をすましていましたら、いちばんよく出てくる話だったので。

「藍染川があつたころはね」という話をみんながする。「ショウガを洗つたよ」とか「大根を洗つたよ」とか、シジミが流れてきたとか、金物だけ揃って売っている人がいたとか、震災の時はあそこの橋を渡つて逃げたから、震災の時までは川があつたとか、雨が降ってくると溢れちゃったから、金魚屋さんの金魚がそっちに溢れて、ただで金魚すくいできて嬉しかったとか、そういう話を拾って書いたりしました。

団子坂という坂の特集、谷中五重塔の特集は、皆が知っていて、それぞれ的人生をそのものが見ていてくれたような、そういう共通体験というものについて、聞いて特集を組みました。こういうことは、この町

で一緒に生きていくという時には大事なんだろうと思うのです。やはり、ある世代を横に輪切りにして、例えば、私たちの世代だとフラフープとか、鉄腕アトム之歌とかを歌うと宴が盛り上がるように。また、世代が違って今度は縦に、同時代というのはなく、同地域という面で見ても、皆が共通に大事にしているものを「大事だよ」とも一回言う。すると、やはりその町を大事にしていこうとか、そこに住み続けていこうという気持を作っていくのではないかなと思うのです。

私たちの地域の歴史的なことを申し上げますと、江戸の最後の日に、寛永寺に彰義隊が立て籠って、上野戦争をやった時には戦場になりました。彰義隊というと、上野の松坂屋から山の入口にかけて、ドンパチをやつてすぐ終わってしまったと思われがちですが、調べてみると、上野の山から谷中、日暮里、根津まで、相当広範囲が戦場になっています。私たちの地域は、寛永寺持ちの田畑が多かった。また、寛永寺の御林もありました。近代は、その上野の山が文化の森になっていって、上野の美術学校、音楽学校ができたこと、反対に本郷の山の上が決まっていた。絵描きとか、彫刻家とか、音楽家とか、学者、学生町というような、下宿の多い町になっていく。

いくらでもやることはあります。鵲外とか漱石とか一葉とか、幸田露伴とか高村光太郎とか宮本百合子とか、作家・芸術家も多く住んでいた。けれども町の人は、ほとんどそういうことは知らないし、気づいていない。そういうことを丁寧に調べて、彼らがここでどういう生活をして、芸術と格闘していたのかというように調べて書いています。

■地域の協力者

雑誌に協力してくださる方は地域の方が多いのですが、皆さん本当に楽しみとか、リハビリでやっているのです。ちよつと病気をされて仕事ができなくなつてしまい、歩行も困難になつたような方が、雑誌に刺激されて、「じゃあ僕はこつちを調べてみる」「前からあれが気になっていたので調べてみる」というようなことで、地域内の井戸の場所の地図を作つたり、墓地の碑文を全部読解してくださつた。私たちは非常に助かりました。

お稲荷さんの場所を全部調べて、由来を書いたりとか、そういう方もいます。子供のころ金魚屋があつたという、そればかりが気になって、ついに金魚屋さんの子孫を探しに江東区のほうまで行つた方もいます。また、ある方は、家の前を昔、赤い水が流れていた、この赤い水の正体が知りたいと

いうので、大変な苦勞をされた。赤い水は明治の草創期にできたレンズ工場のレンズを磨く研磨の赤い紅がらだったということに気がついた。更に調べてみると、明治四年に、江戸時代の数珠玉とか玉磨き職人が、佐野常民にウイーンの万国博に連れて行かれて、レンズの研磨を習つたということが分かつたのです。イタリアモザイクも習つたらしいのですが、その子孫の人と連絡がとれて、イタリアモザイクの作品を見せてもらいました。そして帰国後、根津辺りにレンズ工場を造るのです。そう言われてみると、今、うちの町には理化学機械屋がすごく目立つのです。

■追求する姿勢

ある町に行つて、この商売が目立つなと思つたら、何でそこにあるのだろうというのを追求していくと面白いと思う。私たちの町は、レンズ工場ができたことから、近所にはお礼奉公をすまして一本立ちをした人たちの下請工場ができてたりして、レンズ工場が増えていく。それが今度はプラスチックやピーカーを作るようになるのです。私は、最初は理化学機械が多いのは、単純に本郷に医療機械問屋が多いからだろうとか、東京大学が近いからだろうみたいだと思つていましたけれど、実際に調べるとこのような歴史があるわけです。

私たちの地域では、バイオリン作りがいたという噂があつて、調べてみると、江戸時代の木工芸職人と塗師が、明治になって仕事がなくなり、合体してバイオリンを作つたり、カメラの暗箱を作つたりする。よく結城さんと、「どう凌ぐかだよな」という話をするのですが、やはり人間はどうかとつて生きて、そこで生き抜いていくかというのが地域学で、そのためには三〇〇年続いているけれど、店の職業をどんどこえながら続いているという店もあるし、反対に同じ酒屋で三〇〇年やつているというすごい家もある。

■相互扶助の関係を模索する地域学

いま言ったことをまとめてみますと、権力とか行政ではない、普通の人の生き死にというものを記録する、ということが一つ言えるのではないか。だから、大所高所ではなくて、小所低所に徹するということが大事なのではないか。また、体系的に、いままでですとこの人の弟子はこの人だから、この人の学風はこうで、というような縦の線しか見えないのですが、もつと横の、地域の、さつきから出ているネットワークというか、芋蔓というものが大事なのではないでしょうか。

例えば、大杉栄が大正の震災で虐殺された時に、内田魯庵がすごくいい追悼文を書

いています。全く思想的には逆というか、魯庵などは、大杉みたいな自由恋愛などをしてる人は大嫌いなはずなのに、何でこんな追悼文を書いているのかと調べたら、近所に住んでいたのです。そういうことの意味というのを、最近、山口昌男さんが『挫折』の昭和史などで、こうした芋蔓式の調べ方を提唱していらつしやいます。そこに人と人の関係が見えるということ、大事にしていくべきではないかと思うのです。

そこで暮らすのがより楽しくなり、住みやすくするために、どのように調査結果を反映、あるいは還元していくか。社会学のほうでも今、コミュニティの破壊とか言っています。少し前までは、封建的な地域社会に対して批判的だったのが、またコミュニティの再生とか、いろいろなことを言っています。私たちの地域も、たいへん古い体質を持つている所ですから、何か良いところというのを大事にしながら、昨日住んだ人でも、ちゃんと一人前の住民として遇される、ただ長くいるだけが威張れる根拠ではないというような、あつたかい町、相互扶助の関係というようなものを作っているか、ということに悩みながらやっていると、地域学のかなと思います。

■地域の紹介

私たちの地域を写真で紹介します。

写真1 はん亭さんという串揚げ屋さんです。三階建ての木造の住宅です。土地が狭いから高くしたと思うのですが、ここは波板塀で囲まれた廃屋みたくになっていました所を、買いつつて串揚げ屋にして大変繁盛しております。

写真2 谷中墓地は都心にしては、非常に緑と土の部分が残っているところ。ここから水がしみ込んで、地下水となつて、いまでも使われている井戸が非常に多いです。

写真3 地域学の仲間でもある寿司屋の大将で、野池幸三さんです。一生懸命お祭りとか、いろいろなことを元気にやっています。

写真4 どうしてこのような昔風のゴミ箱があるのかを、東京都清掃局に電話をして聞きましたところ、こういうゴミ箱が使われていたのは、東京オリンピックの時までなのです。オリンピックの時に、日本人はこういう所に生ゴミをドサドサつと入れる非衛生的国民だと思われたいけないということなのです。ゴミ箱はポリ容器収集にかわつて、家の前面にあつたゴミ箱が勝手口の後ろに移される。小さなことのようにですが、非常に生活を変えたことだと思えます。



写真5

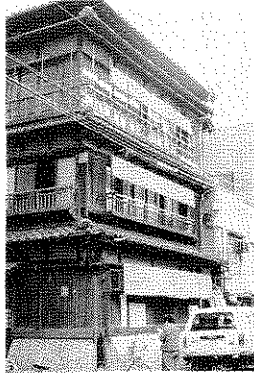


写真1



写真6

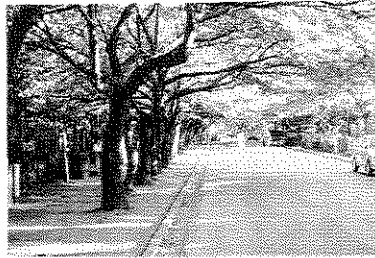


写真2



写真7



写真3

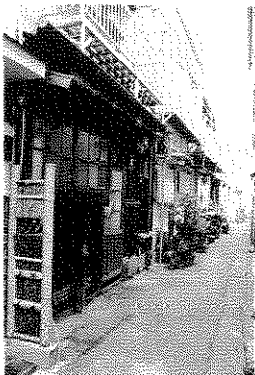


写真8

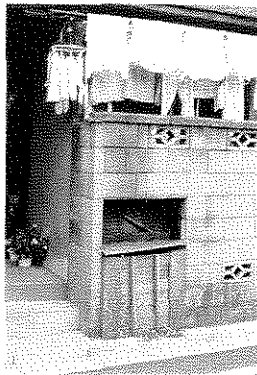


写真4

写真5 乳もみの店がまだあります。上空からこの地域を見ますと、緑被率はほとんどゼロです。ですから、東京都の出している環境指数では、何を見てもこの地域は最悪ということになっているのです。しかし、こういうふうに見てみますと、結構それぞれ植栽を自分たちでやっていて緑の量は多いです。

写真6 「当番」という札が下がっている、地域内ではまだ「組長」と書いてあることがあります。何かこれは危ないのかなと思つたら、戦争中の隣組がいまだにあるのだそう、ゴミや清掃の当番とかやっています。

写真7 上野の奏楽堂は日本最古のコンサートホールです。東京芸術大学で解体する

ところを、市民運動で保存して、台東区の奏楽堂にしています。大変よく利用されています。

写真8 袖垣をちよつと隣との境に作ってみるとか、戸建て住宅のように見せるためにいろいろ工夫しているのですが、かなり増改築もあつてそれで道の幅が狭くなつてしまっているのです。

写真9 本郷の路地の奥には井戸があつて、ウナギの寝床状になっています。奥に長い一筆の敷地を持っています。

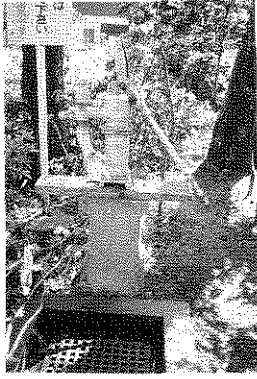


写真9

写真10 いま全面を壊して駐車場にするために、町並みが随分壊れつつあります。知らないで見過ごすような所に、家神様というのがあります。各家にこういう神様とか稲荷の小さいものがあります。路地の奥には、大体火伏せの稲荷と井戸がセットで、路地を守るために置かれています。長屋というのは本当にあちこちから出てきた人たちが住みついたコーポラティブ・ハウスです。この地域は、どこの出身者が多いかというと、東北本線と上信越線が出てきた人が多いのです。つまり、上野駅が近い。まず降りたら、近くに住んだ。いざとなったら、夜逃げするのに便利ということとで住んでいる方が多いようです。

年寄りや子供が遊べる場になっています。質屋さんはまだたいへん活躍していて、外から見るとひっそりしているのですが、中に入ると人が何人もいて、取材に行きましたら怒られてしまいました。「今日は年金の受給日だから、取材なんかに答える暇はない」と言われました。三〇〇坪ぐらいの武家屋敷、旗本屋敷の跡がありました。これを壊してしまつて、いまはスポーツセンターにしてしまつたのです。しかし、背後の崖の緑と防空壕などは残してもらいました。丸の内ではいま問題になっている日本工業倶楽部は、大正九年の建設です。東京駅は横全部が一度には写らない長大な赤煉瓦建築です。この二つはともに残つた大正建築ですが、工業倶楽部は壊されるかもしれません。東京銀行倶楽部の建物は、ファサードだけ残して、上に伸ばしたというものです。いわゆるかさぶた保存です。丸ビルは壊されてしまいましたので残念です。壊さ

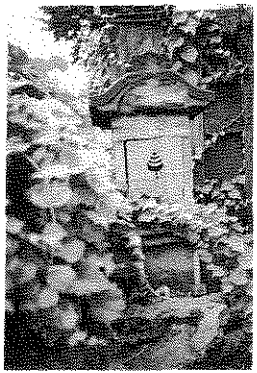


写真10

れる予定もある東京中央郵便局は、私の大好きなすつきりしたデザインの建物です。地域住民がいない、ほとんど三菱地所の店子しかいませんが、そういう所の建物の保存などにも私たちはかかわっています。地域に竹箆屋さんがあります。その店先では小さな盆栽もしています。私もインドのカルカッタや農村に行つてみたことがあるのですけれども、都市の生活というのは非常に脆弱で、やはり魚を捕つたり、食べ物を作つていふというのが、いちばん強いと思います。私たちの地域というのは、いくらいい所だと言っても、そういう食糧生産ができない所です。しかし、ある意味ではかの地域より多少いいのではないかと思うのは、物を作る人が相当残っています。指物師とか竹箆屋とか和服仕立屋とか下駄屋とか、いろいろな職業の人がそこで物を作つていたり、昔からの商店の人がそこで物を売っています。ですから、一日中いる男性も多いです。



写真11

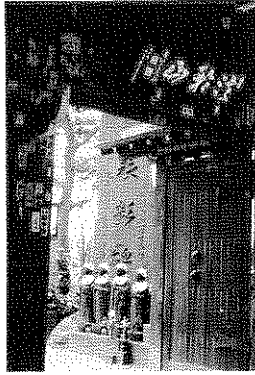


写真12



写真13



写真14

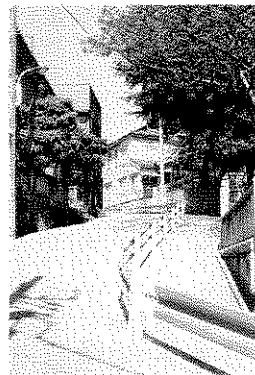


写真16



写真15

写真12 お寺の中の碑を全部見ていくと面白いのです。福神漬発明者、野田清右衛門の顕彰碑があります。野菜屑がいっぱい出るのをどうにかして兵食にしようということで、赤羽連隊などにその刻んだものを醤油につけて納入して、これは七つの福の神がついていると名付けたらしいのです。「酒悦」という店の創業者になります。

写真13 天王寺五重塔は私たちのランドマークでしたが、惜しくも昭和三二年七月四日に放火心中で消失しました。幸田露伴の『五重塔』のモデルです。そのころは、五重塔に入れたらしくて、上野高校の生徒は座って、露伴の『五重塔』の読書会をやったことがあると言っていました。

写真14 玄関の引き戸に見られる郵便の差し方なども、一つの生活文化と言えます。

引き戸というのは、非常にいいものではないかと私は思っています。いまは大体この引き戸からドアに付け替えていくケースが多いのですが、引き戸だと、開いていてもとても安定した感じがあって、外との関係性を暖簾とか簾とか葦簾とかで、何となく曖昧につないでいって、外からも内側の気配が見える。ドアになってしまうと、拒否的に閉まってしまいか、開いていると何か非常に不安で不気味な感じがします。たゞ、いま行政は、この地域の不燃化を促進しておりますので、壊れたらもう一回この木の棧の引き戸にはできない。それでドアになってしまいうケースが多いのが残念です。

写真15 丁字屋は明治二七、八年築の染物屋ですが、何でここにこんな染物があるのかというと、この前に藍染川という川が流

れていて、その川を利用して、洗いをしていたわけです。だから、何でそこにそれがあのかという必然性を探っていくというのが私たちの仕事です。

写真16 S字坂は明治になって切られた坂で無名坂だったので、森鷗外が『青年』という小説の中で、「坂はSの字を書いて曲がっている」と書いたことから、東大生



写真17

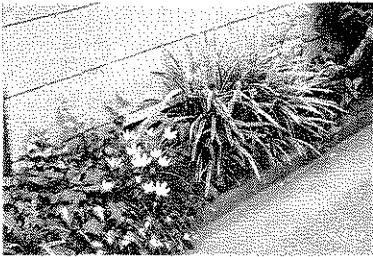


写真18

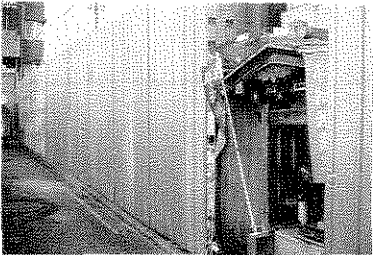


写真19

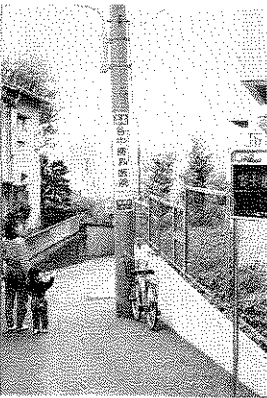


写真20



写真21

が言い出したと聞いています。S字坂という名は、いまでは定着しています。左側は昔の下宿屋建築で、正面の下見張りの家は内田百間が明治の末に住んでいた家です。

写真17 新内の岡本文弥師匠の家は、四半四半邸という四畳半二つだったのですが、いわゆる、お神楽で二階を乗せています。こういうタイプの家がとても多いのです。見た目にはすてきなのですが、震災が神戸で起こってからは、お神楽の家はどうなるのだろうかと心配です。

写真18 この地域の植栽は実用的でして、食べられるものが多いのです。ツルムラサキとか木の芽とかミョウガとかシソとか、そういうものがたくさん植わっています。

写真19 地上げにあった平和地蔵があります。これを話し出すと長くなってしまう

ですが、やはりバブルが来た時に、私たちが悲観をしましたし、こんな雑誌を続けていてどうするのだと思った。コミュニティとして六〇世帯あった所が、五九軒全部立ち退かされた。残ったのが一軒の荒物屋さん。この平和地蔵尊だけ。私たちはキャンペーンで平和地蔵を救えという記事を書いて、これを壊すとたたりがあると書いたので、地上げ屋がそのままにして、いまでもあります。三月四日には冥福を祈る会をやっています。

写真20 東京の中には富士見坂が二一ぐらいあるらしいのですが、富士山がいまでも見える富士見坂はここだけになってしまいました。それで、テレビ局がここを舞台にして番組を作りました。しかし、坂の先にある大きな通りにビルが建ち並び始めまし

た。ちょうど高低差一五mぐらいを埋めるように、建ち始めましたので、富士山は多分半分ぐらい欠けているはずですが、晴れていて富士山が夕方に見えるかもしれないなどという日は、この坂の上に人が集まって夕涼みをしたりする場所になっています。

写真21 バブル最盛期に、都千家という大変素晴らしい建物を壊しました。写真はその後とに建った賃貸集合住宅です。何と、賃料四五万七千円で入居者を募集していました。私たちは壊される前に、持ち主の方のところに行きまして、残した方がいいというものを残してもらいました。スタンドグラスがあったので、保存してもらいました。このスタンドグラスは慶応大学の図書館のスタンドグラスの作家で有名な小川三知という方が作ったものです。



写真22



写真23

写真22 みかどパンは、小さな店です。江戸時代の建物ではないかと思えます。ここでも『谷根千』を売って下さっている。まさに三角（みかど）で、これは江戸の切絵図でも、ずっとここが同じになっています。切絵図を持つて町を歩いて、いまとどう違うかということも仲間と調べています。

写真23 不忍池の地下に駐車場を造るという企画があつて、それに反対する運動を私たちはやってきました。その地域の歴史の文脈を無視した形で、町を計画することが、パブルの時期に行われてきました。私たちがここに駐車場を造つてはいけないと言るのは、やはり歴史を勉強したからです。

新規の池ではなくて、昔の日比谷の奥入江が退水した後に残つた、海の遺構なのです。同時に、大正の震災や戦災の時に私た

ちの町が焼けなかったのは、ここに池があつたからなのです。いろいろな文書を調べてみますと、例えば、東京大学の化学教室で薬品が爆発して、図書館などは全壊してしまつたりしたのですが、湯島の岩崎邸などへの類焼を防げました。それは、不忍池の水を送水したからなのです。

近くにこれだけの水とあれだけの森があるということ、私たちの死活問題というか、安全の上で必要である。しかも、上野の山というのは延焼を防ぐ防火帯になつただけではなくて、震災の後は二〇万人以上の罹災者がずつとそこで暮らす場所ともなつたわけですから、できるだけ施設を造らないで、公園のままで保存したいのです。

これで、写真による地域の紹介を終わります。



討論

○陣内 皆さん方からいろいろな重要な論点が出てきています。これを整理するのなかなか大変なのですが、第一に、地域学がどういうことを狙い、どんな目的、どんなことに役に立つのかということを考えてみますと、皆さん共通するのは、これから生きるときの知恵をどうやったら学べるか、ということが出てきました。また、郷土史との違いがあるだろうと、森さんが言ってくれました。どうしたら、ここでよりよく生きていけるか、あるいは生きていく人にとっての歴史は何なのか、そういう地域の歴史的経験から学んで、これからの生き方を考えることなのでしょう。

豊かな文化、個性ある地域ということもあります。結城さんのお話の中で出たように、もっと経済の問題とか、あるいは環境を考える問題につながっていきます。それは本当にグローバルなこれからの問題です。今まさに日本が次にどうやって社会、地域の発展のモデルを考えたいのか、というのがお先真っ暗みたいで状況で、みんな困っていることが一方であると思うのです。しかし、今日のお話の中にたくさんヒントがあったのではないのでしょうか。それはまさに地域学の担う課題の一つではないかという気がしました。

面白い、元氣の出るといのがやはり重要なことです。そして、ネットワークを作っていく。そういうことを、森さんが町づくりの方向性でお話くださいましたし、橋爪さんのお話の中にも、やはり地域のことを考えることが文化だけではなくて、経済の活力にもなるというお話がありました。

二番目に、では、どうやって調べるか、あるいは語り口をどうするか、という問題が皆さんから出たと思います。小木先生がこれまでの既存の学問と違う、そこから脱した役をやっていく面白さ、未開の原野に入っていく面白さを言われました。

去年イタリアから著名な都市計画家のセツキ先生が日本に來られました。東京も随分見ていただいで大変興味を持ってもらったのですが、彼もイタリア、ヨーロッパで新しい地域づくり、都市づくりのための方法を考えている一人です。非常にソフトなアプローチなのです。よく歩きます。授業で学生にまず歩けと。身体で感じて発見しろ、ウォーキングということ言って、あとはどう記述するか。ディスクリプションをどうするか。確かにいままでのヨーロッパの都市計画は、非常に行政が頑張ってきているのですが、本当に町の人の中まで入っていくソフトな眼差しというのは、意外とないことが多かったのです。

彼は非常に日本の町に関心を持って、谷

中にもお連れしたら大変喜んでいました。調べ方、語り、これはまさに語り口というのは、価値をどうやって描いていくかということともつながって、それは地域で頑張っている、生産している、暮らしている人たちが勇気づけることでもある。あるいは逆に我々がそこから学ぶことでもあるというのを結城さんは随分言われましたが、そういうポイントがあると思います。

資料の在り方ですが、森さんが公的な資料ではない所にこそ、本当に人々の暮らしを掘り起こしていく重要な資料があると言われました。それはなかなか探しにくいので、オーラルリサーチも重要である。パーソナル・ヒストリーを探る方法なども、学問の分野でも最近随分評価されていると思います。どうやってフィリングをするかという、まさにそういうフィリングワークの重要性と可能性についても教えていただきました。

三番目に、序盤のほうで問題になった地域のことを考える上で、個別と普遍、さらに比較をどうするのか。逆に地域固有の面白い話があれば、ほかの人たちにとっては、ある意味では価値がなくてもいいということだ、むしろあるわけです。そういう問題も含めて、こういう地域学の広がり具合というか、これは性格や地域によってさまざまにあるとは思いますが、特に江戸

東京学などをこれからもやっていく上では、重要な視点かなと思っています。そこでステレオタイプ化されたイメージを、どう乗り越えるかという問題もあったと思います。まだほかにも重要な問題がいっぱいあるのですが、ここで、ご出席の皆さんにお話を聞きたいのですが、ちよつと絞らせていただいて、今まで我々の江戸東京フォーラムをずっと一緒に、中心的に運営してくださってきた内田雄造先生に、感想も含めて印象あるいはご質問でもいいのですが、口火を切っていただきたいと思います。その次に、財団を代表して、いままで我々と一緒にやってくださり、サポートしてくださった大坪さんにも同じように、お話をさせていただければと思います。

○内田 小木先生を含めて四人の方々、特に三人の講師の方のお話を非常に興味深く聞きました。最後から印象を遡っていくと、森さんのお話というのは、フィールドが比較的限定されていることもあって、地域に支えられた地域学、あるいは地域を支える地域学、そういうイメージが非常に強くて、おもしろく



内田雄造さん

思いました。その中で具体的には、ネットワーキングが大切なのだとお話を教えられました。私は町づくりのプランナーなので、よく写真を撮ったりしますが、やはり私たちが撮る写真とちよつと違う。地域が何を発信しているかというふうなところが、非常に面白く思いました。

結城さんのお話は、私たちも例えば、町づくりでいろいろ地域をスタディするので、すが、ああいうふうには生活を楽しむという視点が弱い。私たちは上からするのはいいなと思うつつ、一人のプランナーとして町をつくるみたいな発想が、どうしても知らず知らずのうちに強くなってしまうと思います。生活者として地域を楽しみたいという視点が、私たちは弱まっていると思います。生活者に学ぶということが非常に必要なのだということを感じました。

橋爪さんは、いちばんストレートに方法論の問題を話されました。大阪の中で、比較的ステレオタイプ化されたイメージの中で、そのイメージと格闘しながら、普遍の問題、あるいは個別の問題、あるいは比較という方法論、あるいは何かになぞらえる方法とか、そういうことをきちんと整理されていると思います。私たちも学んでいかななくてはいいけないと感じたところですね。以上、感想です。

○大坪 小木先生とは三六年前からのお付き合いで、たまたま一二年前に、この江戸東京フォーラムをお手伝いさせていただくことになりました。

私は建築という物づくり、内田さんなどとも一脈通ずるのですが、小木先生は桐朋学園で人づくりを専らやっておられた。我々に欠けていた、物だけを見る目をさらに広く人、人も肉体的なものよりも精神的なもの、あるいは個人よりも集団社会、物を見るにしても、一つの限られた事件だけでなく、歴史的なつながりで物を見ていくというようなことを、この一二年間の江戸東京フォーラムで、私どもは勉強させていただいたわけです。

ただ、そう申しても、いままでの江戸東京フォーラムの中で特に感じていることは、講師の先生方のお話の内容も素晴らしいものが多かったわけですが、それを取りまいて、分野の違うご出席の方々からの意見、お話、ご質問等が、問題を掘り下げていく過程をまざまざと見ることが何回かございました。それが非常に印象に残っております。

今日、感じましたことは、先ほど内田さ



大坪昭さん

んが言われたことにも通じるのですが、今までの江戸東京フォーラムは、大体研究者の方を中心としたものでした。確かに江戸と東京という歴史的な連続性を含めた、一つの地域の問題だったのですが、今日のお話では、それをどう実際の活動に活かしていくのか、ということの片鱗を、東北の話、谷中のお話の中で再認識させていただきました。そういう意味での実践的な意味を感じたことと、我々の江戸東京学を今後どういうふうにもつていったらいいか、ということについて改めて考えさせられたということを申し添えて、私の意見とします。

○陣内 それでは、とりわけ三人の講師の方の具体的なフィールド、研究あるいは活動をやっておられる方々のお話がありました。それをお聞きになって、まず小木先生から、これからの地域学の可能性とか課題とか、そういうことも含めてお話をいただければと思います。

○小木 今日具体的なお話は、大変いい勉強になりました。エリアをどうするのかというのが、一つ大きな問題だと思います。それによって中身がだいぶ変わってくる。それから方向性というのは、皆さんは本当に生活者というものの目を大事にする、しかもそれは学者が物を見ていくという態度

ではなくて、生活している同じ人間が同じように見えていこうとする。ですから、非常に並行なレベルで物が見られる。上からでもなく下からでもない。そういうところに大きな感動を覚えました。これはやはり地域学でないと出てこないところだろうと思います。

しかし、難しいのはこれから先です。私は前にも申しましたが、学際的に研究していく一つの大事なポイントは、誰がこれを始めたとか、そのようなことよりは、これを連带的に大きなものにしていくという指向です。今日は東北の話、大阪、そして東京もありました。東京で暮らしていても、森さんのお話などは私どもが知らないことがたくさんありました。そういうことを大事にしていく連帯。また、森さんが結城さんを恩師としているという、そういうお話などもとても面白かったし、いいお話だと思えます。やはり人間の連帯というのは非常に大事だと思えます。

大阪の橋爪さんから、この会が江戸東京学の始まりではないかというようなお話がありました。誰が始めてもそんなことはいかまわないと思うのです。私が江戸東京博物館におりましたから、そこが震源地だという話もあるのですが、どこが震源地であるかと、そんなことはかまわない。結果が大事なのです。今までの学問のような形では

ないことをやるのですから、すべて、スタイルも変えていくというくらいの気持が必要で。

私は京都大学の日本文化研究所に二年ぐらい客員のような形で行っていたのですが、その時に、いま東京大学の教授で活躍している人が、ある先生の前で発表したときのことです。その先生はもうお亡くなりになっていますが、「もうひとつでんな」と言っていたのです。我々はもう一つ何かを足せば、この研究発表はいいのだというふうに理解して、お茶を飲んだ時に、「おめでとう」と言ったら、「とんでもない。もうひとつということとは、あれは駄目なことなんだ」と。そんな言い方をされて私はびっくりしました。しかし、これは都市学をやる場合に、非常に大事だと思えます。

要するに、長い間洗練されている京都のような都市では、相手をちゃんと持ち上げながら、実は相当なことを言う。それは東京の学会では絶対にはないのです。もう駄目なもの頭から、お前は何をやっているのだと。それでもう学問をやめるなんていう人がたくさんいるのですが、「もうひとつでんな」と言われたら、私などはほっこりというか、そういう感じになってしまう。それはやはり都市の持つている一つの雰囲気を表しているわけですから、同じ都市学をやるといっても、地域学をやるといって

も、そう簡単なことではありません。それを認識しながらやっていくのは、相当大きな問題です。今日はこの会場でいろいろな種が蒔かれました。それぞれの場でこれをまとめていくような方向にもっていったらすばらしいものができ上がるのではないかと思えます。ですから、将来の地域学に大いに期待をしたいというのが、今日の感想です。

○陣内 どうもありがとうございます。

次に、お話いただいた順番でまた少し語っていただきます。ほかの方々のお話も聞かれた後で、今いろいろお思いになることもあるでしょうし、さつき言い残されたことも含めて、お話いただければと思います。

結城さんのお話の中で、都市と山間部、農村部の交流というか、その辺でいろいろお考えのことがあるようなので、そのところも含めて、ご発言ください。

○結城 先ほど申し上げたのですが、私たちが追いかけてきたある価値みたいなものは、確かに今までもあったし、これからもあると思うのです。都市的なものであったり、歴史の必然だろうと思えます。ただ、何か次が見えなくなってきたという感じが、ここ一〇年ぐらい私などにはありません。仙台という町も、そうではない何かを

探しているなというのが、地元学みたいなことをやっているのと、感じるわけです。

それは何だろうかと時々差し出していくと、みんながにっこりと笑う時があります。その笑うところというのは、何か忘れ物してきたみたいところが、例えば、山のほうであったり、海の人たちであったり、写真でお見せした人たちとの、あつ、俺たちもそこら来たのだ、随分ご無沙汰していたけれども、そこもう一度つながりたいたけれども、それを単に昔を懐しいというのではなくて、もう一度結び直しをしたというみたいなき感じがちよつとあります。仙台が仙台であるためには何が必要だろうか、私は最初に申し上げましたが、いまの仙台になるためには、仙台はまだ東北であったり、山であったり、海であったりした部分を、どこかで切らざるを得なかったみたいなどころがあると思うのです。

それをもう一度、そちら側の山の人たち、海の人たち、ああいとおじいさん、おばあさんたちと一緒につなぎ合せて、それらを自分たちの地域の中に、もうひとつ結び直したい。そういう意味で、再開発だとかいろいろあるらしいのです。東京には越後屋があつたり、近江屋があつたり、歴史的にいろいろあります。あれは別に越後の商人たちがこうしたとかと同じように、仙台の中にも津軽屋があつたり、釜石屋があつた

り、石巻屋があつたり、鶴岡屋があつたりしてもいいはずなのです。もう住民はそちらの人たちのほうが多いわけです。

もう一つは、経済のことです。経済は今までとは違ってきましたが、無視することはできません。鶴岡とか釜石などのつながりを図っていききたい。よい仕事の間を自分たちの所に作りたい。知恵と技術でもって、結果的に支え合う関係みたいなものを目指せないだろうか。そうして、仙台もちよつといいぞというふうになつていききたい。そういう意味では、地域学というのはもちろん否定は含みませんが、結局は自分の地域、それぞれの所を肯定していく学なのだろうなというふうに思いたいです。肯定していききたいということと、つなぐという場と、そういう意味では、ちよつとなくしてしまつた場みたいなものが、異なるものをつなぐ場みたいなものが、随分仙台などでは薄くなつてきたり、狭くなつたり、細つているので、その場を広げたい。その場がこの土壌とつながっているか、水とつながっているか。東北のさきほど写真で紹介したじいさん、ばあさんたちという所と何かつながるような場を、作りたいものだというのが仙台で描いていることなのです。話が少し、抽象的になつてしまいました、申しわけありません。

○陣内 ありがとうございます。

橋爪さん、今日はご自分のご専門の文化空間とか遊びの空間、そういうものを中心にさきほどご紹介くださったのと同時に、大阪の内部にいろいろ地域学というか、地域があつて、そこでもいろいろな活動があるというお話がありました。一方、東京では、今日は谷中地域の地域学ということで、森さんがお話してくださったのですが、大阪でもそういうアプローチというか、生活空間、生活の場みたいなことを地域学としてやろうとする動きのようなものが、あるかどうかということも含めて、お話しただければと思います。

○橋爪 大阪でも、やはり従来なかつたような主体が地域学的なる動きを始めています。

さきほどの北の新地のママさんたちが動き出したというのも、そうですし、それ以外で私がかかわっているのは、大阪の下寺町という寺町のお坊さんが、地域に関する提案をしています。あまり知られていませんが、京都、名古屋、大阪が、日本で寺の多い三大都市なのです。大阪は日本で三番目の宗教都市ですが、これまで全然認知されてないわけです。知人である、あるお寺の四〇歳ぐらいの住職が、新たにお寺を建て替えて、その本堂をシアターと兼ねよう

としたのです。

彼の最初のアイデアは、ボタン一つでご本尊が床に収納されて、あとは小さな劇場になるということを考えたのですけれども、その宗門の偉い人は、それはけしからん、ご本尊の上で人が踊るなんてことはあり得ないというのです。それで、ご本尊を奥の壁面に掛けて、パフォーマンスする時は幕が下りてくる劇場を造りました。應天院シアターという劇場なのですが、私はこの企画について助言役として関与していました。

彼は、地域の職人を再評価しようということをいう。大阪にもいろいろな職人がまだいます。彼の仕掛けは、その職人たちをそのまま紹介するのではない。間にパフォーマンスのアーティストとか、芸術家を取り込もうとしたのです。若手の劇団員を、町に放して、職人たちの仕草とか、語りとか、全部取材させてくるのです。そして、それを勉強させて、舞台で独り芝居をさせる。地域の子供たちを集めて、昔の職人たちはこういうように格好よかつたというあたりを舞台で見せる。芝居はそれで終わって、終わった瞬間にピンスポットがポーンと落ちて、おっちゃんが一番最後に一言ポーンと、格好よく舞台に出るということを彼は考えたのです。

また、その寺町全域で、日本やアジアの

人形劇芝居を用意して、何一〇カ所とあるお寺でスタンブラーをやるうとしていた。面白いのは、寺とアーティストたちのコラボレーションから、地域に対する目を開こうという動きがあることです。

美術館なども、新しい地域学的なる展開をしていて、さっき申し上げた阪神間学という枠組みの中に活かしている。西宮とか芦屋とか宝塚とか、各地域に美術館があるのですが、これらがネットワークを組んで、去年、「阪神間のモダンニズム展」を成功させました。六つの美術館が連携して、地域の歴史とかアートを全部もう一度見直すような合同の展覧会を行った。行政の区画を越えて展覧会をしたのです。しかし、あまり人は入りませんでした。非常に画期的だったと思います。アート系の人たちもいま地域のことをますます意識しだしているのではないかと思います。

もう一つは、商店街でも従来の地域との関係性とは違ふかたちのなかで、地域学の動きが明確に見えてきたことです。日本中どこでもそうですが、商店街というのは非常に経営が苦しくなっている。大阪などでもそうなのですが、従来の商店街の人たちは、とりあえずアーケードを作って店舗が空いたら、新しいお店を誘致して埋めていく。要は商店街が初めにありきと。それではなかなか商店街の発展にならなくなつて

きたので、もつと商店街を中心として半径何kmかほどのエリアを想定して、広い所に地域の人がもつと動き回るような状況を作りましょう、という考え方を持つようになった。初めに地域ありき、その中に商店街の生き残り策が見えてくるという考え方で、商店街振興を始めようという事例が、いくつも出てきています。

心斎橋筋商店街というのが大阪にあるのですが、そこも去年地下街が近くにできるのを契機に、地域の歴史とか文化をもう一度振り返ろう、という展覧会を企画したのです。私はその展覧会の図録を作って、かつキュレーションをやったのですが、図録は地元の本屋二店と展覧会場だけで、一週間で五〇〇〇部を売り切って、あと二〇〇〇部増刷して、合計七〇〇〇部をさばいたのです。一つの商店街でそれぐらいのことができるのだというのが見えた。あるいは、天神橋筋商店街とか伏見の大手筋とか、いろいろな商店街が、その商店街の利益だけではなくて、地域全体のことを考えましようという動きが、出てきています。

今日ここに参加して非常に刺激的でした。とりわけ地元学という言い方を結城さんが言われたのですが、それは非常に深いことだと思えました。ひよつとしたら、地域学とは全然違う概念だと私は理解したのです。また、森さんが、地域学と郷土史とは違う

と言われて、これも非常に考えさせられました。私は三〇年後に郷土史家になろうと、今から狙っていたのですが、ちよつとやめようかなと思つたのです。やはり郷土という概念は、その土地に生まれ育つた者が偉いのかという話になっていくと思うのです。そこで生まれ育つた人だけではなくて、わずか二カ月、三カ月しか住んでない人でも、その地域、地元に着のある人を巻き込んでいくような動きが、あつていいだろう。だから、郷土史ではなくて地元史という考え方が大事なのかなということを、強く思いました。

もう一点だけ、方法論の話をうがかつていて、思いだしたことがあります。京都に現代風俗研究会という社団法人があります。桑原武夫先生などが始められた研究会です。今年には風俗研究の方法論をテーマにして、一年間ずっと続けています。そこで私たちは、要は、風俗研究というものは方法の学問で、常に新しい方法論を編み出していくのだという話を確認しました。

中心になつてゐる社会学者、鶴飼正樹が言つてゐるのは、風俗研究とは究極は何か。これは一人一学会である。学会構成員は一人でもいい。みんなが学会長である。例えば、そういう人が三人集まれば、三学会合同の共同研究会をいつもやつてゐるわけである、という話をしてゐたのです。これは「学際

的」という言葉を、半ば揶揄している面もあるのですが、結局、学際的先にあるのは、やはり人と人の際ではないでしょうか。ひよつとりの方法論とか学び取り方というものがあつて、その境い目に地域研究というものが成り立つていくのではなかるうかと思ひます。鶴飼さんは私に、何か新世界学でも通天閣学でもいいから、誰もほかに言ひそうもない学会を作れと言われるので、遊園地学なるものを提唱しようと思つてゐるところです。

○陣内 ありがとうございます。

最近東京だけではなくて、日本各地でこゝういう地域学的な動きが起つてゐますね。舟運で発達した中世、近世の川の港町で、福井県の三国という、たいへんいい町があります。そこで、ナショナルトラストの活動の一環として地元でシンポジウムがありました。森さんも行つてお話をされたそうです。また、最近では伏見でも橋爪さんとおやりになつたと聞きました。森さんは、こゝういう地域学がどのぐらい起つてゐるのかという実感も持つておられると思うのですが、そういうことも含めて、地域学に期待するところとか課題とか、何かそんなこともちよつと触れていただければと思います。

○森 さつき橋爪さんが言われた、ステレオタイプな像を壊すのは、地域学でしなればいけないということでしたが、本当に私もそう思っているのです。東京でいえば、NHKが放映している朝七時のニュースでは、NHKの屋上から見た新宿高層ビルが映ります。地方に行くと、それが東京だというふうになっていくらしくて問題です。そういうイメージで皆さんは東京を思っておられる。ただ、東京は単に首都であつたり、金融中枢であつたり、国際経済都市であるのかもしれないけれども、同時に、多様な生活都市でもあるということを考えていきたい。

例えば、東京にしても、神楽坂とか向島とか荒木町とか、いろいろな所で新しい地域の、それが単に活性化とかお金を目指す町おこしなどはまた違ったレベルで、しかし、好事家的な調べ物というものでもないような感じで、生き生きと楽しく生きていくために、いろいろなことを調べている人が多いと思うのです。

私自身も一五年、何の方法論もなく、あまり定義もせずに、地域学とか学際とか使つてしまつて恥ずかしいのですが、こういう場でほかの方から、あなたがやつていくことはこういうことなのだよということ、ちよつと違う視点から位置づけていただく、また少しよく分かつたり、やる気が出

たりします。地域としては狭いのですが、そこをやつていくためには、民俗学も文学史も美術史も宗教学も、政治史とか経済史とかいろいろなことを勉強しなければいけなかつたので、本当によく勉強したんだなと思ひます。

もう一つは、いま私たちの地域にいる人が、どうしたら中心商店街とか地域の中で手作りのものを保持していけるのか、システムをどう作れるのか。全部が大量生産にのみ込まれるのではなく、リストラにあつて悲劇だと思つてもなく、何か新しい生き方が探せないのか。

しかし、私は見ているんです。例えば、指物などは、取材して思つたのですが、これはもう斜陽産業だとか、あんな高い物は買わないよとか言うのだけれども、その中には必ず一人や二人は、ものすごく目が爛々として指物師がいる。また、本が売れない書店は駄目だとか、数字で説明すると暗いのですが、頑張つて業績を上げたり、売上げを上げながら、楽しく生き生き商売をしている書店もいるのです。そういう人たちに学んで、何か違う満足感をつくつていく必要があるのではないかと思つています。

この一五年というのは子育て、赤ん坊を高校三年生、中学三年生、小学校六年生に育てながらこういうことをやってきました。

二〇年間パスポートを持つていなくて、自分でも外国に行つてみたいと思わなかつたのですが、今年、一段落したので行つてみました。そうしましたら、外から見ると自分の地域がよく見えるし、また日本のあちこちに行つて、その問題を眺めてみて一緒に考えて、自分の地域のことをよく分かつていく。これからはできるだけ外にも出ようと思つていきます。

○陣内 どうもありがとうございます。私なりに簡単にまとめ、フォーラムを終わりたいと思ひます。皆さんのお話を伺つてみると、いま日本は経済も社会も行き詰まり的な状況があつて、これ乗り越えていかなければいけないという、深刻な現状です。しかし、生き方を考えていく、新しい可能性を切り開いていく、その時に、やはり地域が非常に重要になるだろうと思ひます。そして、そういうことを考えていく、広げていく、切り開いていく学問として地域学があるのかなという気が、お話を伺つていてしました。

都市や農村や、いろいろな広がりがあるわけですが、その歴史的に培われたいろいろな知恵とか、文化的なアイデンティティとか、人々のネットワークとか、そういう今までは眠つていた、あるいは活用されていなかつたものを掘り起こして、光を当

てて、人々が共通の認識を持てるようにして、自信も持ち、プライドも持ち、輝きを持って、地域づくり、環境づくりをしていく、そういう道しるべになるような、ある意味で非常に実践的な学問のかなという気もしました。

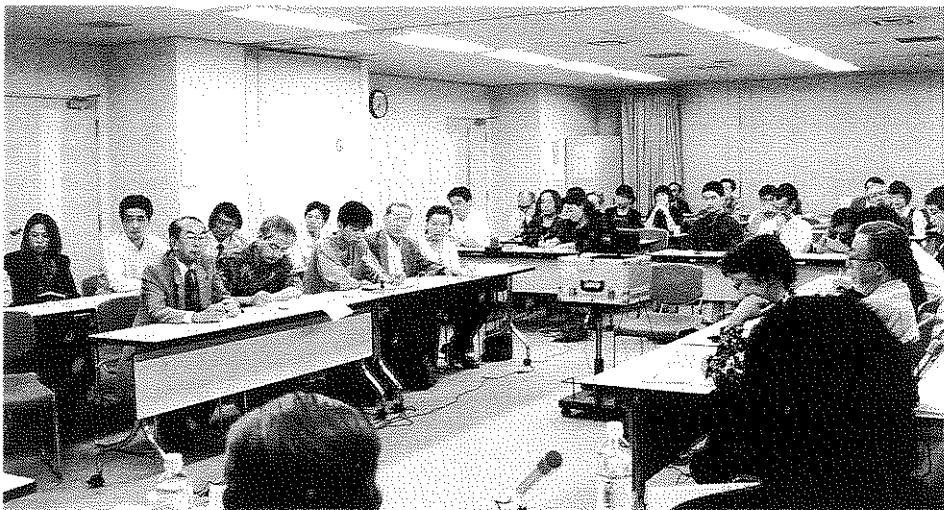
それは多分、郷土史という従来のものは、大きく違っているだろうし、まさに地元学とか地元史というお話もありましたが、そういうもののかなというところをつくづく感じました。そして何よりも開かれた学問ではないかなと思います。これは内と外、つまり、そこにずっと暮らしている人だけではないし、よそから来た人、漂流した人、外国人も含めます。

また、従来の学問と違って、学者のプロだ、アマチュアだとか、そういう垣根なんか全然意味をなくしていく、新しい知の領域ではないかなという気がします。都市と農村という区分も、意味をなくしていくし、あるいはもう一度有機的な、本来持っているものを取り戻していく、再生していくという方向性を持っているのではないかということも、結城さんのお話を伺って感じました。ヨーロッパでは、そういう方向でどんどん考え方が変わっていった、都市計画や地域計画でも、非常にソフトなことを考えている人たちが多いのです。日本はまだそれが少ないのではないかなと感じています。

そして当然ながら、開かれた学問、都市間の比較とか国際的な比較とか、非常に大きな課題と可能性を持っている領域かなと思います。また、ここが江戸東京学の本丸かな、などということが、最初に橋爪さんのお話にありました。小本先生は、リーダーシップが誰であっても、そのこと自体が漸進的に広く広がって、ネットワークをつくっていくことが重要だというお話がありました。まさにそのとおりでして、新しい仲間の輪をどんどん広げて、今後も江戸東京学を一つの地域学のケースとして、我々も東京の中にもっと深く入り、地元から学び、一つの大きいダイナミックな学としてやっていければと思っております。

今後皆様方、一緒にやっていきましょうということで、一人ひとりが学を持つべきだという話もありましたので、それぞれの方がご自身のテーマを深めていただいて、また江戸東京学、あるいは地域学という形で、いつもディスカッションできるような場を作っていきたいと思えます。

本日は長い時間、熱心に参加していただきまして、ありがとうございます。



講師・司会者紹介

■小木 新造(おぎ しんぞう)

江戸東京博物館顧問
東京都大田区生まれ(一九二四年) / 東京教育大学文学部日本史学科卒業 / 文学博士
著書

「東京庶民生活史の研究」

「東京時代―江戸と東京の間で―」

「江戸東京事始め」

「江戸東京を読む」

「江戸東京学への招待(一)」「(二)」

受賞

「角川源義賞」「毎日出版文化賞」

「東京都文化賞」

桐朋学園大学教授、上越教育大学教授、国立歴史民俗博物館教授、江戸東京博物館館長を歴任する

■橋爪 紳也(はしづめ しんや)

京都精華大学人文学部助教
大阪府大阪市生まれ(一九六〇年) / 京都大学工学部建築学科卒業 / 京都大学大学院工学研究科修士課程修了 / 工学博士 / 京都精華大学創造研究所所長
著書

「にぎわいを創る」「大阪モダン」

「倶楽部と日本人」「祝祭の(帝国)」「明治の迷宮都市」

受賞

「橋本峰雄賞」

「デイスブレイデザイン研究賞大賞」

イベント空間、盛り場、商業施設、集客装置に関する歴史的研究と現状分析から、広く都市文化を論じる

■結城登英雄(ゆうき とみお)

まちづくりプランナー
満州生まれ(一九四五年)
山形大学人文学部国文学科卒業 / 有タスデザイン室代表 / 宮城教育大学非常勤講師 / 農業実践大学非常勤講師
著書

「山に暮らす・海に生きる」

地域資源と地域文化を軸にした地域振興のために、東北各地をフィールドワークをしている

■森 まゆみ(もり まゆみ)

作家
東京都文京区生まれ(一九五四年)
早稲田大学政経学部政治学科卒業 / 東京大学新聞研究所修了 / 朝日新聞書評委員
編集・刊行「谷中・根津・千駄木」
著書

「谷中スケッチブック」「深夜快読」「寺暮らし」「明治東京畸人伝」「抱きしめる、東京」「隅外の坂」

受賞

「サントリ―地域文化賞」

「芸術選賞文部大臣新人賞」
赤レンガの東京駅保存、不忍池などの自然環境の保全運動にかかわる

■陣内 秀信(じんない ひでのぶ)

法政大学工学部建築学科教授
福岡県北九州市生まれ(一九四七年)
東京大学工学部建築学科卒業 / ヴェネツィア建築大学留学 / 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了 / 工学博士
著書

「東京の空間人類学」

「都市のルネサンス」「ヴェネツィア」

「東京・エスニック伝説」

「江戸東京学への招待(一)」「(二)都市誌篇」

受賞

「サントリ―学芸賞」

「日刊工業新聞技術科学図書文化賞」
東京の都市空間の根幹である「江戸」の都市計画を探るため、東京を歩き回り、現在の東京と江戸との密接な空間構造を解明する

■江戸東京フォーラム話題一覧

() 内の所属は話題提供時のもの

1986年7月～12月

- 第1回 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供……………小 木 新 造 (歴史民俗博物館)
 第2回 都市下層社会の形成と変容……………内 田 雄 造 (東洋大学工学部)
 第3回 やわらかい都市構造……………陣 内 秀 信 (法政大学工学部)
 第4回 考現学の考古学……………佐 藤 健 二 (法政大社会学部)
 第5回 明治期の道路 (街区)・路地の幅員基準について……………石 田 頼 房 (都立大都市センター)

1987年1月～12月

- 第6回 博覧会と盛り場の明治……………吉 見 俊 哉 (東京大学文学部)
 第7回 明治期の繁華街の建築……………初 田 亨 (工学院大学)
 第8回 東京の土地・住宅史……………長谷川徳之輔 (建設経済研究所)
 第9回 江戸の構成と構造……………加 藤 貴 (北区教育委員会)
 第10回 水の都・深川成立史……………吉原 健一郎 (成城大文学部)
 第11回 江戸の建築技術……………西 和 夫 (神奈川大工学部)
 第12回 松浦武一郎の一畳敷の書斎……………ヘンリー スミス (国際基督教大学)
 第13回 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京……………井 上 勲 (学習院大文学部)
 第14回 路上から見た江戸・東京……………藤 森 照 信 (東京大学生産研)
 第15回 東京書物探索入門……………大 串 夏 身 (都立中央図書館)
 第16回 神田のサウンド・スケープの研究……………鳥 越 けい子 (法政大学)

1988年1月～12月

- 第17回 絵画史料にみる江戸の町……………波多野 純 (日本工業大工学部)
 第18回 明治期東京の飲料水販売……………松 平 康 夫 (東京都公文書館)
 第19回 江戸城御殿の室内空間について
 ー障壁画下絵による復原ー……………西 和 夫 (神奈川大工学部)
 第20回 小江戸・川越のまちとすまい……………内 田 雄 造 (東洋大学工学部)
 第21回 現代東京の祝祭……………松 平 誠 (立教大学)
 第22回 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住……………岡 本 哲 志 (岡本都市建築研)
 第23回 浅草寺の境内・門前世界……………竹 内 誠 (東京学芸大学)
 第24回 都心定住を考えるー市街地の「町」の現代的意味ー……………奥 田 道 大 (立教大社会学部)
 第25回 都市社会調査の歴史から……………佐 藤 健 二 (法政大社会学部)
 第26回 世界都市東京の光と影……………町 村 敬 志 (筑波大社会科学)

1989年1月～12月

- 第27回 都市の語り出す物語……………宮 田 登 (筑波大歴史人類)
 第28回 江戸の都市計画ー江戸前島を中心としてー……………鈴 木 理 生 (区立京橋図書館)
 第29回 江戸の武家屋敷について……………北 原 糸 子
 第30回 江戸の被差別・東京の被差別
 ーもうひとつの江戸・東京ー……………大 串 夏 身 (都立中央図書館)
 第31回 江戸東京の遊びーかるたを中心にー……………村 井 省 三 (村井かるた館)
 第32回 森 鷗外の都市論……………石 田 頼 房 (都立大都市センター)
 第33回 東京都心部における空間利用形態……………山 下 宗 利 (筑波大地球科学)
 第34回 「響き」としての東京の街なみー神田地区における
 建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心にー……………鳥 越 けい子 (サウンドスケープデザイン)
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題……………奥 田 道 大 (立教大社会学部)

1990年1月～12月

- 第36回 鶴屋南北の幽霊……………横 山 泰 子 (国際基督教大学)
 第37回 東京と近代詩……………行 吉 正 一 (江戸東京博物館)
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐって
 ーマンションの老朽化と建て替え問題ー……………内 田 雄 造 (東洋大学工学部)
 第39回 東京の地価……………前 田 尚 美 (東洋大学工学部)
 第40回 江戸の地価……………伊 藤 好 一 (関東近代史研究家)
 第41回 江戸のごみ処理……………伊 藤 好 一 (関東近代史研究家)
 第42回 都市農業と土地問題……………石 田 頼 房 (都立大都市センター)
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京……………吉 見 俊 哉 (東大新聞研究所)
 第44回 江戸の名所・王子……………加 藤 貴 (北区教育委員会)
 第45回 上水からみた江戸の都市計画……………波多野 純 (日本工業大工学部)
 第46回 江戸名所絵における遠近法……………ヘンリー スミス (コロンビア大学)

1991年1月～12月

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗……………丸山伸彦 (歴史民俗博物館)
 第48回 歛形惠斎の江戸一目図屏風……………小澤弘 (調布学園女子短大)
 第49回 見立絵というもの……………鈴木重三
 第50回 江戸住宅事情……………片倉比佐子 (東京都公文書館)
 第51回 江戸・明治・大正のすまい……………平井聖 (昭和女子大学)
 第52回 最近の自治体住宅政策について……………林泰義 (計画技術研究所)
 第53回 東京市営住宅事業について……………内田青蔵 (東工大附属高校)
 第54回 東京における水際土地利用の変容
 —日本橋川と隅田川を中心として—……………岡本哲志 (岡本都市建築研)
 第55回 江戸から東京への景観構造変化……………窪田陽一 (埼玉大学工学部)
 第56回 東京都の都市計画と河川運河……………昌子住江 (関東学院大学)
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい……………内田雄造 (東洋大学工学部)

1992年1月～12月

- 第58回 新宿ヤミ市の復原……………松平誠 (立教大学)
 第59回 歛形惠斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」を
 めぐって……………小澤弘 (調布学園女子短大)
 第60回 芝居町と観客—都市文化の底流をさぐる—……………小木新造 (江戸東京歴史財団)
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動……………鈴木栄一 (千代田区議員)
 第62回 近代演劇人による伝統の発見……………横山泰子 (国際基督教大学)
 第63回 博覧都市江戸東京……………吉見俊哉 (東大新聞研究所)
 第64回 読売から新聞まで……………GERALD GROEMER
 第65回 音の風景と近代の忘れもの—大分県竹田市
 瀧廉太郎庭園整備計画をめぐって—……………鳥越けい子 (ナト・スケープ 機構)
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活……………初田亨 (工学院大工学部)
 第67回 ヴェネツィアの経済空間—交易・市場・職人—……………陣内秀信 (法政大学工学部)
 第68回 都市のまつり……………宮田登 (筑波大歴史人類)

1993年1月～12月

- 第69回 江戸、初期の土地問題……………吉原健一郎 (成城大文芸学部)
 第70回 江戸勤番武士の生活……………竹内誠 (東京学芸大学)
 第71回 江戸のおんな……………杉浦日向子 (江戸風俗研究会)
 第72回 大名屋敷跡地の住宅地開発—麻布霞町の場合—……………加藤仁美 (跡見学園短大)
 第73回 新説・日本近代住宅史……………藤森照信 (東京大学生研)
 第74回 幻の東京オリンピックと万博……………磯村英一 (東京都立大学)
 第75回 東京市社会局と都市社会調査……………佐藤健二 (法政大社会学部)
 第76回 近代における東京の都市庶民住居の発展……………江面嗣 (文化庁文化財)
 第77回 江戸の町と京都の町……………小川川保 (清水建設機研)
 第78回 「まち」の死に立ち会うとき—汐入をめぐって—……………伊藤毅 (東大工学部建築)
 第79回 谷中墓地をめぐって……………森まゆみ (谷根千工房)

1994年1月～12月

- 第80回 首都の葬送空間—江戸・東京の火葬場と墓地—……………八木澤壮一 (東京電機大学)
 第81回 葬式のフォークロア……………宮田登 (筑波大歴史人類)
 第82回 東京—極集中と今後の課題
 —より豊かな都市空間をめざして—……………東郷尚武 (東京市政調査会)
 第83回 東京都政の50年……………大串夏身 (昭和女子大短大)
 第84回 博物館の住宅展示を考えて
 —人々は生活史をどうみるか—……………ジョルダン ナト
 第85回 都市空間とセクシュアリティ……………上野千鶴子 (東京大学文学部)
 第86回 メディアとしての絵はがき……………佐藤健二 (法政大社会学部)
 第87回 メキシコシティと東京の間で……………吉見俊哉 (東大社会情報研)
 第88回 北京と東京の比較都市論
 —歴史的空間構造と近代化のメカニズム—……………陣内秀信 (法政大学工学部)
 第89回 川越のまちなみの復元……………内田雄造 (東洋大学工学部)
 浅井賢治 (東洋大学工学部)
 第90回 河鍋曉斎と江戸東京……………小木新造 (江戸東京歴史財団)

1995年1月～12月

- 第91回 都市と美術館と絵画—パリ・ロンドンと日本—……………小澤弘 (調布学園女子短大)
 第92回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺……………丸山伸彦 (歴史民俗博物館)
 第93回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料……………天野隆子

第94回	歌謡曲のなかの東京	大串夏身	(昭和女子大短大)
第95回	江戸の着物文化	田中優子	(法大第一教養部)
第96回	江戸東京学への招待試論	小木新造	(江戸東京博物館)
第97回	「境内」からみた三都—三都の比較都市史序説—	伊藤毅	(東京大学工学部)
第98回	盛り場考	神崎宣武	
第99回	近都市空間の創出過程について		
	—都市構築の基盤材調達の視点から—	北原糸子	
第100回	江戸東京学への招待	小木新造	(江戸東京博物館)
	—生活の舞台としての都市空間—	陣内秀信	(法政大学工学部)
		高階秀爾	(国立西洋博物館)
		田中優子	(法大第一教養部)
		司会:内田雄造	(東洋大学工学部)
第101回	都市の民俗学—色・音・匂の変化—	小林忠雄	(歴史民俗博物館)

1996年1月～12月

第102回	同潤会柳島アパートの生活	大月敏雄	(東京大学工学部)
第103回	同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設について	佐藤滋	(早大理工学部)
第104回	住文化の体験の場としての博物館	小澤紀美子	(東京学芸大学)
第105回	縁切寺—東慶寺と満徳寺—	高木侃	(関東短期大学)
第106回	考古学からみた江戸と他都市との比較	小林克	(江戸東京博物館)
第107回	日本パノラマ館と凌雲閣—浅草の2つの巨大建築は、当時の人々にどのような印象を残したか—	平井聖	(昭和女子大学)
第108回	震災復興<大銀座>の街並みから	石川幸恵	(清水建設総務部)
第109回	明治初年の大火と貧富分離論	石田頼房	(工学院大学)
第110回	震災復興計画の理念とその遺産—東京、仙台、名古屋、神戸、広島等をめぐって—	越沢明	(長岡造形大学)
第111回	関東大震災後の東京の住宅地形成について	藤岡洋保	(東京工業大学)
第112回	カフェーと喫茶店	初田亨	(工学院大学)

1997年1月～12月

第113回	橋のアーバン・デザイン	伊東孝	(日本大学)
第114回	城下町大坂、江戸の都市設計	篠原修	(東京大学工学部)
第115回	東京都都市景観マスタープラン—新たな景観まちづくりへの展開—	布施六郎	(東京都)
第116回	江戸・東京の湯屋	松平誠	(女子栄養大学)
第117回	江戸城から宮城へ—皇居を中心とする都市空間の変容—	米田雅子	
第118回	江戸藩邸物語	加藤貴	
第119回	建築家、佐藤功一と都市への視線	米山勇	(江戸東京博物館)
第120回	明治の歌謡にみる東京	大串夏身	(昭和女子大短大)
第121回	「江戸名所図会」と長谷川雪且	鈴木章生	(江戸東京博物館)
第122回	町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水—絵図・図面にみる江戸の都市施設—	波多野純	(日本工業大学)
第123回	参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—	原史彦	(江戸東京博物館)

1998年1月～12月

第124回	寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化	榎木真	(新宿歴史博物館)
第125回	関東・東国の部落史—部落史の「見直し」論議に引きつけて—	藤沢靖介	(部落解放研究所)
第126回	明治期の被差別部落—都市東京と植民地主義の言説編制から—	友常勉	(部落解放研究所)
第127回	関東大震災と朝鮮人虐殺事件	石田貞	(埼玉同和教育協)
第128回	原宿の空間構造—人気の秘密を歴史から読む—	柳瀬有志	(法政大学工学部)
第129回	横浜市の市営住宅事業について	水沼淑子	(関東学院女子短大)
第130回	目白文化村とその変貌	八木澤壮一	(東京電機大学)
第131回	住総研創立50年記念公開フォーラム—地域学の明日を考える—	小木新造	(江戸東京博物館)
		橋爪紳也	(京都精華大学)
		結城登美雄	(まちづくりプランナー)
		森まゆみ	(作家)
		司会:陣内秀信	(法政大学工学部)

住宅総合研究財団創立50年記念 懇親会開催

フォーラム終了後、同会場「スカイサロン」において、参加者のみなさんと、講師・司会者の方々と交えて、懇親会を開催しました。直接、意見交換ができる貴重な機会でもありましたので、多くの方に参加をいただきました。



懇親会の席でも、新しい仲間の輪をどんどん広げて、今後も江戸東京学をひとつの地域学のケースとして、地元から学び、そして大きなダイナミックな学として展開させることに話題が弾みました。

江戸東京フォーラムは、いつでも、みんなで、ディスカッションができる場であり続けたいと考えています。今後とも、よろしくお願い申し上げます。

「地域学の明日を考える」

1999年6月7日 発行

委員会＝小木新造・内田雄造・陣内秀信

監修＝小木新造・陣内秀信

発行人＝峰政克義

発行所＝財団法人 住宅総合研究財団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋4丁目29番8号

Tel. 03-3484-5381 Fax. 03-3484-5794

E-mail:jusoken@mxj.mesh.ne.jp

URL:http://www.jusoken.or.jp/

印刷所＝株式会社 七映

住宅総合研究財団について

当財団は、1948(昭和23)年、当時の窮迫した住宅問題を、住宅の総合研究、および成果の公開・実践・普及によって解決することを目的に、当時の清水建設社長・清水康雄氏の私財の一部を基金として設立された財団法人です。

以来50年、現在は住宅に関する研究助成事業を中心に、シンポジウムの開催、機関誌「すまいるん」の発行などの活動を続けています。

- ・基本財産 23億5,900万円
(1999年3月末現在)
- ・年間事業費 8億円